

## [016] 九大國文學會誌

<https://hdl.handle.net/2324/7429631>

---

出版情報：九大国文学会誌. 16, pp.1-71, 1940-03-01. 九州帝國大學國文學會  
バージョン：  
権利関係：



# 大國文學會誌

第六十號

昭和十五年三月發行

---

楚囚之詩	一
猿蓑とところどころ	七
ことばの問題と南九州	二二
詞玉緒延約について	三七
甌島方言の音韻に關する報告	三七
石山寺本「大般若經音義」殘缺の倭言に就いて	四三
筑紫路の菊舎尼	四九
古代研究の一基礎	五五
お知らせ	五九

---

大國文學會

# 楚 囚 之 詩

— The Prisoner of Chillon —

高 木 市 之 助

この四月京城から福岡へ引越して來たうち、の書齋は、一應整理はした積りでも、時々意外なところから意外な本が出て來て面喰ふ。併しさうした出來事は、不思議に其の本をも珍しく思はせて、ついそのまゝ讀みかへしたりする。楚囚之詩も最近そのやうな偶然によつて久しぶりに讀みかへしたに過ぎない本の一つだが——

楚囚之詩は勿論北村透谷の初期（二十二才）の作であつて、自序に「余はこのやうにして余の詩を作り始めませふ」と言つてゐるのに隨へば彼の處女作か或は少くとも書初のみとまつた作だつたことになる。透谷全集にも透谷子漫録摘集中に自序と共に收められてゐるが、この間讀んだ私の本は透谷全集ではなく、單行の原本を翻刻した小冊子なのである。尤も全集所收の漫録摘集によると明治二十二年四月十二日の條に

「楚囚の詩」と題して多年の思望の端緒を試みたり、大に江湖に問はんと印刷に附して春祥堂より出版する事とし、去る九日に印刷成りたるが又熟考するに餘りに大膽に過ぎたるを慚愧したれば、急ぎ書肆に走りて中止することを頼み直ちに印刷せしものを切りほぐしたり。自分の参考にも成れと一冊を左に綴込み置く。

とあつて、本書は漫録に綴込んだ本の外は全部破棄された筈であるが、事實は必ずしもさうでなかつたと見えて、當時早稲田大學の學生だつたといふ村田平二郎氏が一部を藏してゐたのを、石川巖氏が村田氏に懇望して、昭和五年の夏原型のまゝ翻刻したのださうである。唯原本表紙の茶褐色羅紗用紙が手に入らなかつたので似寄りの物を代用したとことわつてゐる。

百部の限定版であるから、翻刻後約十年も経過した今日では、案外珍しいものになつてゐるかも知れないが、誠に粗末な小冊子で、型は四六版の横綴、自序二頁、本文二十四頁、表紙には中央に

北村門太郎著

#### 楚 囚 之 詩

とあり、奥附は明治二十二年四月七日印刷、同年四月九日出版とし、著者は神奈川縣士族北村門太郎、京橋區彌三衛門町七番地、發行所は春祥堂とある。十七頁に挿畫が一枚、丁度そのあたり、(第十一、第十二節)を畫いたもので、畫家は署名がはつきりしないが月耕と讀まれる。挿畫の前頁に透谷のことわり書があつて、

次の畫は甚しき失策でありました。是れでも著名なる畫家と熱心なる彫刻師との手に成りたる者です。野邊の夕景色としか見へませぬが、獄舎の中と見て下さらねば困ります。

とあるのによればこの月耕は當時の挿畫の大家尾形月耕であらう。

#### 二

一體透谷がバイロンに負うてゐる事は透谷論でよく言はれる事だが、楚囚之詩とバイロンとの具體的な交渉を説いたものは、管見の範圍ではまだ見當らない。かつては本間久雄氏は「透谷とバイロン」(早稲田大學歐羅巴文學研究會編、浪漫思潮(發生的研究)二三五—二五〇)に於て透谷の蓬萊曲をバイロンのマンフレッドに比較して其の類似點を指摘して

ゐるが、もし「透谷とバイロン」を考へようとすれば先づ楚囚之詩と「The Prisoner of Chillon」の交渉から始むべきであつたらう。バイロンの此の詩は、全集本の解説によると一八一六年（三十六才）の夏彼がチロン城を訪うた直後同じスミスで制作され、同年十二月他の七篇と共にはじめて出版されたものであるが、透谷がこの詩を知つてゐた事は彼の「マンフレッド及びフォースト」に於て

故にその詩（註曰・バイロンの詩）の如きも往々にして咄嗟の間に成り熟練を積む事なかりき。プリズナー、オフ、チロンの名篇も僅かに三日子を費せしのみなりと聞けり云々（全集五〇〇頁）  
と言及してゐるのも明かである。

兩詩を對照して見るに、先づ其主題に於て、どちらも、牢獄に繋かれた囚人の憂愁と煩悶に充ちた生活を叙してそこに作者自身の不羈奔放な所謂浪漫的精神を托したものであり、其の趣向を見ても、主人公が同罪數人（バイロンは兄弟とし透谷は同志の者としてゐるが）と陰慘な牢獄に拘禁され、日、月、鳥、獸等を伴侶とした長い孤獨の生活の後に、最後の節で許されて再び自由の身となるといふ點は共通である。唯受刑の理由がバイロンは殉教の爲であるのに透谷は「曾つて誤つて法を破り政治の罪人として捕はれたり、余と生死を誓ひし壯士等の數多あるうち余は其首領なり云々（本文第一）」としてゐるが、これも、チロン城の實話として傳はるものは却て透谷に近く、實話の主人公 Bonnard は情熱的な革命家且つ愛國者で、ジュネーヴの獨立を企て、チャールズ三世の忌むところとなり、チロン城に六年間も幽閉の身となつたといふのである。（全集本、解説に據る）

個々の語句の上にも兩詩のつながりを求める事はそれほど困難ではない。例へば、第二の始に  
余が髪は何時の間にか伸びていと長し、

（三行省略）

歲月重ねし故にあらず

又疾病に苦む爲ならず

浦島が歸郷の其れにも

はて似付かふもあらず云々

とあるはバイロンの方で巻頭の

My hair is grey, but not with years,

Nor grew it white

In a single night,

As men's have grown from sudden fears: —

を想はせるものがあり、第三の

なれど其壁の隙すき又た穴あなをもぐりて

逃げ場を失ひ、馳込む日光もあり云々

は、第二節の

A sunbeam which had lost its way,

And through the crevice and the creft

Of the thick wall is fallen and left; —

に當り、第三の

彼等は山頂の驚なりき

自由に喬木の上を舞ひ云々

は第四節の

(When day was beautiful to me

As to young eagles, being free) ——

を彷彿させ、第十五の

鶯は再び歌ひ出でたり

余は其の歌の意を解き得るなり

百種の言葉を聞き取れば

皆余を慰むる愛の言葉なり！云々

は、第十節の

And song that said a thousand things,

And seemed to say them all for me ! ——

と無關係であり得ないやうなものである。

三

楚囚之詩はこのやうに具體的に The Prisoner of Chillon と交渉してゐる。併し剽竊とか模倣とかいふ汚名でこの關係を呼ぶには、透谷とバイロンと二人の氣質があまりに酷似してゐる。主題、着想、語句等々に亘る兩詩の類似はそれ自身の個々の類似ではなく、もつと根本に横たはる二人の氣質の上の呼應の結果に外ならぬ。吾々は類想類句の奥に欄々たる透谷の情熱がどんなにバイロンによつて燃え上つたかに驚くべきである。

尤も楚囚之詩は一面確かに失敗の作であつた。作者が月耕の挿畫を評した語は皮肉にもそのまゝ彼の詩を評する語であつてよい。もつといへばこの畫にはどこか透谷の詩の欠陥を發いたやうなところがあつて、むしろいかにもその詩を語つてゐるともいへるかも知れない。併し幸にして透谷の詩の背後にはこのやうな挿畫の語り得なかつた何ものかがある。それは謂はば詩以前に於てバイロンと呼びかはす或激越な精神氣魄である。

同じ事が二年後の明治二十四年にくりかへされ、彼の情熱は再びバイロンの *Manfred* に煽られて蓬萊曲となつたのであるが、そこにも楚囚之詩と同様の失敗（程度の差はあつても）と、この失敗を無視したやうな激情の奔騰とがある。もしこの場合失敗の方を取りたてて行けば彼の詩は殆ど詩の名にさへ値しない拙作といふことに歸着せざるを得ないが、逆に、右の所謂「激情の奔騰」だけを取りあけるならば、そこに吾々は詩の正しい地盤の上に立つ彼の姿を認めざるを得ないであらう。彼がバイロンを評して「思想は實にアルプス山より落つる崩雪の如く然も想像は一小詩人よりも多からず」（全集五〇〇頁）と言つてゐるのは、そのまゝ彼自身への批評でもある。さうして透谷に於てこのやうに想像から見はなされ、而かも「アルプス山より落つる崩雪の如」きものとは、畢竟楚囚之詩に於てバイロンと共にあつた、或はバイロンを貫いて生きた彼の精神そのものに外ならないであらう。

（昭和十四、十、十七）

# 猿蓑こころどころ

小 島 吉 雄

## 一、かますご考

猿蓑連句、「きりぎりす」の巻に、

ゆふめしにかますご喰へば風薫る

といふ句がある。わたくしは、此の句が大變好きで、此の句を朗吟すると、少時盛んに食べさせられた「かますご」の味が記憶に甦り、且聯想を呼んで、實に何とも言へぬ爽快の氣を覺えるのである。大阪地方では、早春二月の頃から出廻りはじめ、四五月の交に至る。大きさは、普通三寸か三寸五分位、四寸位になると子をもつてゐる。大略、巻煙草の敷島位の長さで太さはバットかチェリー位と思へば間違ひがない。子をもつ位の大きいになると、太さも敷島かそれ以上ある。大きいほど味は大味になるが、子をもつほどののは、また脂がよく廻つてゐて、味もまたよろしいといふ人もある。彼岸から花見頃にかけて、この子持ちの大物が出てくるのである。食べ方は、丸のまま二杯酢にして、頭ごとバリバリとやるのである。灰白色の無鱗の丸い魚でこまかい硬骨をもつてゐるが、その骨の小氣味よい齒あたり舌ざはりが愛食家の賞でるところらしい。父の友人に千田ちのといふ村長さんがゐたが、村役場からの歸りに毎日のやうに立寄つて、父が留守でも母に一杯つけて貰つて飲んで行く、その人が至つてこの「かますご」が好物であつて、これがあれば他に何にも要

らぬといふ。殊に此の人の風變りの好物として「かますご鮓」といふのがあつた。かますごを中味にした巻ずしである。あんな生臭いものがどうして好きなんだらうと母は言ひ言ひしてゐたが、父は、「いや、あれにも乙な風味がある」などと言つてゐた。安物魚で、百目が何錢といふやうな値で、勿論貴顯の御前に出るやうなものではない。和漢三才圖會の記載では「爲賤民食」とある。大阪近郊の田家では普通の總菜料理である。

東北帝大の教授連の芭蕉俳諧論講などを見ると、どなたも此のかますごの實物をご存じない。七部集の註釋書として最も人口に膾炙してゐる婆心録の如きにしても、

「かますは夏月瓜膾に住也、子といふは五六寸ばかり、二三年経たるは尺餘あり」と述べてゐて、かますごを「かます」の子だと考へてゐる。かますごがかますの子でないことは、和漢三才圖會その他の記事によつて明かである。以加奈古、又名、加末須古とあるから、古來、かますごは「いかなご」の別名であるらしい。

「かますご」といふ語の分布範圍はどういふ風になつてゐるか詳しいことは知らぬが、芭蕉俳諧研究に山田孝雄氏の追記では、愛媛縣あたりでも、さう言つてゐるらしい、しかし、山口縣大島郡の産である藤井重一君は「かますご」を知らない。訊けば、「いかなご」ならば知つてゐるといふ。その話では、「いかなご」の形状や利用法が全く和漢三才圖會若しくは攝揚群談に記載のとほりである。すると、同君のいふ「いかなご」は此れ等の書の所謂かますごに同じもの考へられる。攝揚群談の名物土産の項に、「いかなご」西成郡佃村の名産とある。そして、この魚は「かます」の子に似たるを以て世に梭魚カヌスゴとも云へり。川邊郡尼崎、矢田部郡兵庫津等の浦邊にも網之。魚油を煎採りて、其辛カラを市店に送り、或は田圃耕作の家に求め埋之地を肥せり」とある。三才圖會によれば、早春は神戸沖にとれ、季節の推移につれて段々西遷して夏至の頃、下關沖から取れるやうになるといふから、大體に於て、この魚は瀬戸海方面の産物と思はれ、關東方面に取れぬものらしい。關東地方の人々が此の魚のことを知らぬのも當然だと思ふ。

非常に脂肪の多い魚だから、これを湯搔くと釜中に脂が浮く、その脂をすくひ取つて魚油とするのである。食用にするのは、その脂を抜取つた身殻であるらしい。藤井重一君の故郷あたりでは、大抵煮干にして食べる。或は稀に甘煮にして食べることもあるといふ。虚子氏の歳事記等でも、いかなごは春季、煮干しにして食するとある。すると、乾物にして食べるのが普通で、乾さずに酢で食べる食べ方は大阪附近獨特の食べ方らしく思はれる。ひさご集の乙州の句に

雪のやうなるかますごの塵

とあるのは吠に入れた煮干しのかますごだといふのが定説で、而もこの句では春季になつてゐる。辭苑や言海等の辭書類はつまり此の句を語例にして説を立ててゐるので、わたくしの頭にあるかますごの感じとは凡そ程遠いものとなつてゐる。わたくしは、此の乙州のいふかますごは、脂を取つてあとの身殻を乾物にしたもので、肥料にするかますごであると考へてゐる。あの酢で食べるかますごにも、既に形のくづれかけたものが屢見出せるから、あれを乾したら、恐らくポコポコとして粉にだけたのも出来て、魚粕のやうに埃つぽいものだらうと思ふ。

今まで發表せられた諸家の註解を讀むと、いづれもかますごを食つたことがないやうである。樋口功氏のやうに京都に永く住んでゐられる人でも「かますご」の味をご存じなく、婆心録の誤りを踏襲してをられる。頼原氏の註解だけは、流石にすぐれてゐて、正確であるが、ただし、膾にして食つたのだらうといふ説明は、かますごを知らぬ讀者に誤解せられるおそれがある。膾といふ概念からは、あの丸ごと頭から骨ぐるみに食つてゆく感じがはつきり出て來ないからである。

幸田露伴翁は、「かますご喰へば風薫ると續けたる甚だ拙にして、」と言つてをられるが、これも矢張りかますごの味をご存じないからの言である。昔者、かますごは乾物ばかりでしか食べなかつたといふ證據が出て來ない限り、攝揚群談の所謂「其辛を市店に送り」の文から推定して、わたくしは二杯酢にする食べ方が、昔もあつたと信じ、ここ猿蓑の句を、早仕舞の夕めしにその二杯酢のかますごを食つてゐる爽快な気分として受取るのである。

ただ茲に幾らか問題になるのは、「風薫る」と「かますご」との季の相違である。かますごは大體に於て春のものであるのに、薫風は少し季節がそぐはぬ。しかし、初夏の頃でも商人の持つてくることがあるし、もう少しのちまで姿を見せることも時にはあるらしいから、この點はさほど氣にする必要もなからうと思ふ。凡兆は京都に住んでゐた人だから多分此のかますごを食つた経験があつたらう。その酔で食べる爽快さと野趣とを強調したくて、深く季節に拘泥することなく、かますごの味感を生かすにふさはしい「風薫る」を取合せにしたのではないか。此の句の味はひが、讀んで直ぐわたくしにはピンと感じられるのである。従來の註解ではかますごを食ふのは漁家の體だと解くのが普通だが、必ずしもこれは漁家とは限らない。むしろ、かますごを珍重して食べるのは、農村のあたりである。されば、

蛭の口處をかきて氣味よき

といふ芭蕉の附句も生じるのである。また、かますごの産地が、尾崎や兵庫やといふので何れも摩耶山に地理的に近く、加之、前述のやうなかますご料理は畿内だけのものらしいから、この句を摩耶の高嶺に結び付けた凡兆の意圖も明かになつて、面白いのである。

辭書によつては、「いかなご」を九州方言では「かなぎ」又は「かなご」といふとある。「いかなご」を方言で「かなぎ」といひ、従つて「かますご」と「かなぎ」とは、全然同じものであるといふことが假令、學問上の事實であつても、わたくしの氣持の上では、どうしても兩者同種といふことが納得出来ない。それぞれにその醸し出す情趣が全く異なつてゐるのである。感じが違ふのである。博多一見る「かなぎ」は、いづれもコチコチの乾物であつて、京阪でいふ所謂「ちりめんざこ」（東京での「しらす干し」）の大きなのに似通つてゐて、わたくしの郷里などで「出しざこ」といふのと、ほぼ同様のもののやうである。いくら大きいと言つたつて、ゴマメより大きな「かなぎ」は市場に見かけないやうだ。わたくしは念のため出入りの魚屋に、「かなぎ」の大きさ、又食べ方等を尋ねてみたが、大きさは一二寸、三寸といふやうな

のは先づないとの事、食べ方は殆ど今言つた「ちりめんざこ」と同じで、時たま乾さぬのを煮付けにして食べる人もあるが、多く乾物にするので、生のままは殆ど市場に出て来ないとの事であつた。酢では食べたりしないさうだ。わたくしの郷里では、「しらすぼし」を酢で食べることもあるにはあるが、所謂かますことは全然その味もその感じも異なることは、説くまでもない。「ざこ」や「かなぎ」の乾物を食べてゐたのでは、薫風爽快野趣を満喫することが出来ないのである。此の句の味を知るには、まづ、かますごを食つてみねばならぬ。

(附記。以上書上げたのちに、藤井重一君が再び来ていふには、かなぎの煮干しは保存のためであつて、大抵七月頃まで保存し得るといふ。そして、その煮干しを二杯酢にして食べるやうだといふ。煮干しのかなぎは、普通二寸位の大きさだといふが、此の大きさは三才圖會の説くところと同じである。もし、煮干しのかますごを二杯酢にして食べるとすると、凡兆の句は、「風薫る」に抵觸しないことになる。凡兆の句は或いは、煮干しのかますごを食ふのかも知れない、しかし、なほ、わたくしは、自分の體驗に執して、前述のやうな解釋に未練を覚えるのである。これは我執かも知れない。それにしても、一度、煮干しのかますごを食つてみたいと思ふ。)

## 二、二 番 草

同じく猿蓑の「市中」の巻に

二番草取りもはたさず穂に出でて

といふ第三がある。婆心録によれば、

「豊年の様なり、今一潤ひあらば千金ならむと門々に咄す片側作りの百姓家の並びたる體なり」

といふ。婆心録が「豊年の體なり」といふのは、逆志抄に、「例年ならば四番五番もとらねば穂が出ないのに今年は炎天

續きで稻穂もぐんぐん延立つた様子である」と説いてゐるのに従つたのである。七部集打聞にも、

「いつの年よりも暑きに稻のみりよく穂にいでたる也」

と述べてゐる。爾後、大抵の註解者はこれに従つてをり、幸田露伴氏も太田水穂氏も結局はこれと同説である。どうして、かういふ解釋が成立つかと甚だ不審であるが、畢竟これらの解は、農家の實際にうといための誤解といふより他はない。太田水穂氏の「芭蕉連句の根本問題」には、更に附加してかういふ文がある。

「一番草は陽曆では七月中旬、二番草は八月上旬頃と見てよい。三番草まで取るのが普通になつてゐる。之れは地方によつて幾分異ふ」

また、これに續けて、

「何となき豊年らしい賑ひの感じが出てゐる。しかし、又一方から考へれば、二番草ごろに穂の出るのは早魃のためである」と解してここを凶年とする解も成立つとおもふ」

と。これを以て思ふに、一番草、二番草の草取り時期をほぼ固定的なものとして考へてゐるために、豊年とか凶年とかいふ思ひつきが生じてくるらしいのである。普通、稻穂の出初めるのは、八月下旬である。ところが、今、太田氏の説のやうに假りに二番草を八月上旬とすれば、(近畿地方を標準にして言へば實際は二番草の標準時は七月中旬から下旬にかけてである)稻穂が暑氣のために生育早く八月下旬に出る筈のものが八月上旬にも出初めたといふことになる。草取りの時期を固定的なものとして考へれば、このやうな解釋とならざるを得ない。而も、炎天のために生長がよいから穂が例年より早く出る、だから豊年だと言つたり、或いは早魃のために穂が早く出るから不作などと考へたりするのは、愈以て笑止なる論であつて、陽氣のために多少出穂に遅速はあるにしても、半月も一月も早く穂が出るといふやうなことは、特別の耕作法を講じない限り絶対にあり得ないと考へてよろしい。又、早魃も甚しくて不作を將來する程にもなれば、却つて出穂

も遅れるものである。更に、上記諸註釋の解釋に従へば、若し京阪のやうに七月中に二番草を取るところでは、七月中に穂が出てしまふことになつて、誠に不都合である。恐らく作者去來は京阪の風土を基準にして作句してゐるのであらうから、或いは七月中に稻穂が出てしまひさうである。蓋し、かういふ不都合は、草取り時期を固定的なものと考へるからであらう。草取りといふものは、元來さういふ性質のものではない。田舎育ちの諸君は何れもご存じであらうが、一番草の取りはじめを同じ頃にはじめても、二番草、三番草は時により家によつて幾分遅速の生じるものである。人手が足りなくて手の廻りかねる時には自然と遅れようし、また雨量が少なくて稻田に水の乏しい時には草取りが出来かねるからこれも亦自然とおくれざるを得ぬ。かういふ風に二番草三番草等には年によつて遅速のあるものである。稻の方は幾ら早魃だらうが、暑氣かきびしからうが、大體八月半頃から穂の用意をしはじめ、同月下旬に入つて穂が出て、九月のはじめ即ち二百十日から二十日頃にかけて花が咲くのであつて、此の時期は毎年ほど一定してゐる。だから、固定してゐるのは寧ろ出穂の時期である。遅速あるは、草取りである。そこで此の句の解釋をわたくしは次のやうに下したのである。

「人手が足りないか、或いは何か家庭に事故があつて、草取りが手おくれで、なかなか耕作地全部に手まはりかねる、それで他家がもう三番草も終り、四番草の塗込みも終つて草取りをあけてしまつてゐるのに此方はまだ一番草を終つて二番草の最中である。そして、まだ二番草も取りきつてゐないのに、ぼつぼつ穂の出で来た田も見えて来た。」

といふので、追はれるやうな慌しい氣分でせか〜と忙しがつてゐる農家のさまである。前句、「暑し暑しと門々の聲」といふのに晚夏農村の氣趣を感得して、此の付句となつたと見るべきであらう。

次の付句「灰打ちたくうるめ一枚」は、さ様な忙しひな農家の一情景である。金網を用ゐず、火の上に直接うるめを載せて焼いたので、灰がついてゐる。それ故、そのうるめを手もしくば火鉢の縁などで叩いて灰を落す仕草を大映しにしたのである。

波鷗の「七部集講義」の解釋は、わたくしの上記の説に一番近い。曰く、

「未だ二番草取果さず、はや穂の出でかゝりたるにて、在所のせわしきさま也。脇句の門々の聲を在所のいそがしきさまにして發句の市中に轉じたるなり」

と。他の註解書の如く、穂の出たのを陽氣の所爲にしてゐないところが、手柄である。

大芭蕉全集の註釋もやはり陽氣の所爲にしてゐてその釋不充分である。全體を通觀して大芭蕉全集の解は優れてゐるのだが、この句のところは、よろしくない。

此の句「取りも果さず」と言つたところ、如何にも田草取りの實情に適合してゐて、實に妙手であると思ふ。――

さて、わたくしは、以上の事を學生諸君に話して來て、その夕べである。いつもの如くビールの小瓶を傾けながら、些か得意氣に此の話を出妻にすると、山妻は、わたくしの出鼻を挫くが如く、かういふのである。

「それは早ひでりですよ、早で田に水がなくて、草取りが思ふやうに出來ず、そのため二番草を取りきらぬうちに、もう穂の出る時期になつてしまつたといふのですよ。」

成る程、此の解釋はよいと思つた。水不足といふことにすると、脇句の「暑し／＼」とも非常によく合ふのである。そして、實際水不足のため草取りが出來かねるといふことはよくあることなのである。山妻は、文學的な素養も知識も少しも無いのだが、根が百姓の娘だから、かういふことになる。經驗に照らして案外よく分るらしいのである。此の夏休みに所用あつて歸省したら、現に今年は雨が少くて田に水が無く、草取りが出來ぬと言つて老父達は弱つてゐる。そして、少しでも水氣のある田は、その干上らぬうちに、急に急いで人手を増して草取りをしてゐるのである。まだ一番草が廻りかねてゐるといふ話であつた。かういふ實際を目のあたりにすると、山妻の説は愈よろしきやうに思はれるのである。それで、これで、わたくしは、夕涼みながら家父にその話を持ち出すと、家父は最初はわたくしのやつたやうな解釋を下した。更

に、妻の意見を話すと、さういふ風にも考へられるとも言ふのである。結局、百姓としての立場からは、兩方どちらの解釋も成立つといふのである。尤も、今年のやうに早りもひどいになれば、此の句のやうに悠長に「穗に出でよ」來ないから、此の句の場合は、日照り続きで草取り時分にだけ水不足だつたといふやうな事情にしておかねばなるまい。

さうすると、此の句は、わたくしが教室で述べた意味でもよし、また家妻が言つた水不足のためといふ解釋でもよし、どちらにとつてもよいと、敢へて家父の説を信じるわけではないが、此の頃のわたくしは考へてゐる。しかし、炎天暑氣のために稻の穂が早く出たのだといふ考へは、農事にうとき、絶対に間違つた説だと信じ、さういふ解釋を排斥する。

### 三、「油かすりて」について

「きりぎりす」の卷の脇句

油かすりて宵寝する秋

の、「油かすりて」については、諸説あつて一定しない。「かする」といふ言葉の意味が、明確でないのである。既に諸君も御承知の如く、七部集婆心録は、「かする、といふのはかすり取るの義で、燈し残りを油皿から油差しにかすり入れるのである」と言ひ、燈しのこりを油差しに移すのは節約のためであるとするのである。更に又、逆志抄は、「かするは澗の意で、油の自然と減つて無くなることだ」といふのである。此の二説が二代表となつて諸註その何れかに荷擔するのである。然し、逆志抄にいふやうに澗の意味ならば、これは自動で、「油」が「かする」の主語となるのであるから、普通ならば、「かすれて」でなければならぬ。此のことは既に先輩の指摘せられるところであるが、幸田露伴氏などは、此の弱點を補強するために曉臺の説を引用し、かすれてといふ場合に、かすりてといふのは伊賀伊勢の方言である、故に油の盡きる場合に芭蕉はこのやうに表現したのだと述べてをられる。果して、かすりては伊賀方言であるかどうかまだ調

査してゐないが、たとへ伊賀方言であるとしても、此の場合芭蕉がわざ／＼一般語でない伊賀方言を使用して連業の理解困難を將來するほどの心無さを敢へてするといふことが呑み込めぬ。だから、こゝのかすりての語は他の連業にも即座に理解出来る一般通用語だつたに違ひないのである。とすると、やはりその語法が問題になる。逆志抄系統の説をわたくしは採らない。

嘗て藤井紫影先生の説に、かすりは儉約することで、先生の御郷里たる淡路では今もさういふ風に用ゐるといふことであつた。最近の先生のお考へは伺つてゐないが、頼原退藏氏の説では、

「人の事をば三郎兵衛といふべきを三郎、五郎左衛門を五郎などかすりていふ」(好色堪忍袋卷三)

とあつて、簡略にすることを「かする」といふから、油をかするは、つまり油を節約することであると、評釋江戸文學叢書の俳諧名作集に出てゐる。しかし、わたくしは先生の説にも頼原氏の説にも承服し得ないのである。此の御二人はわたくしの最も尊敬する方であるが、こゝのところだけは、どうも納得が出来ないのである。

今様廿四孝卷四の文は、先年わたくしも之れを發見して學生諸君に語つたところであるが、頼原氏も「かする」の用例の第一番に此の文をあけて、「これは油入の底までかすつて油皿についだ意であらう」と述べてをられる。即ち、その文といふのは、

「極月廿六夜の月まだ出ぬ深夜業フカヨナベに、かすりし油たちしまひ、はつとして消ゆる燈火」

といふので、この「かすりし油」は、どう考へても油壺の底をかすつて油皿に油を注いだと解するより外に考へやうのないものである。器物の底に少量しか残つてゐないものを、杓子等ですつかりかすり取るに、何々をかするといふは、今もいふことであつて、例へば、「湯をかする」、「釜の飯をかする」などといふのは、釜底にある湯とか飯とかを杓子でかすり取することを意味してをるので、こゝの油をかするといふのも、同様の言ひ方である。その釜底からかすり取つた湯

や飯の如きを、「かすり物」又は單に「かすり」ともいふことがあつて「男はかすりを食べると出世が出来ぬ」などといふ俗諺もある。「かすりを取る」などといふ成語もある。そこで、芭蕉の句の「油かすりて」も、右の用例と同じ意味の「かすりて」であるとわたくしは考へる。又、頼原氏が他にあげてゐる數例、たとへば、

賀茂祭、半兩の油かするやもろかづら

ふろあがり、茶がまをかする酒の酔

一釜かする美濃の莖長

等、いづれも、「かすりし油」のカスルと同義にとつて少しも差支へがないやうである。たゞこれらの場合では、器物か  
らかすり取つた上に全部用ゐ盡すといふ意味が添加するかとも思ふが、酒の酔に湯茶を節約するでは通じないし、賀茂祭  
に半兩のあぶらが節約せられるといふのも無意味である。半兩もの油をかすつて使ふところに面白味があり、茶釜の湯を  
かすつてなほ渴望するところに風呂上りの酒の酔が生きてくるのである。頼原氏が最後にあげてゐる好色堪忍袋の「五郎  
左衛門を五郎などかすりていふ」の「かする」と油かするや茶釜をかするの「かする」とはその用法意味が全く別種なの  
である。語原的にはどういふことになるのか知らぬ。しかし、具體的には、堪忍袋のかするは掠の義である。油などの場  
合は、器物の底をカサ／＼鳴らして底溜を掻き出す動作そのものをいふのである。蓋し芭蕉の句の場合も今様廿四孝の場  
合と全く同じ語意であらう。

「かする」をわたくしと同じやうに理解してゐる人に、東北帝大の岡崎義惠教授がある。芭蕉俳諧研究にその見解が示  
されてゐる。但し、

「かする位の一二滴の油をともしたか、それともこれだけの油を燃やしてもとそのままつけずに寝たか、それは句の中  
に云つてないから立ち入らないことにしたいのです」

と言つてゐるのは少し物足りない。わたくしの見解では、今もいふやうに、かするはかすり移さうとする動作そのものをいふのである。だから、かする動作をして、而も燈火をつけずに宵ねするといふのであるから、勿論かすつたけれども燈火をともしつゞけるだけの油の無かつたことが言外に明かである。われわれは、「かすりて」の「て」といふ助詞の表情に注意しなければならぬ。

さて、わたくし此の句の解は結局、次のやうになる。

「秋の長夜、夜業ヨナベでもしようと思つてゐると行燈の油が切れたやうである。油を差さうとして油壺を取り出したが、それにもない。かすつてみたけれども一筆ほどしかない。今さら油買ひに行くのも億劫だから、えゝ、まゝよとそのまま宵寝してしまふのである。」

婆心録は、「秋中油をきらすことあらむや」と言つて、かやうな解釋を排斥してゐるが、まだ油があると思つてゐたのに、さてもう切れてゐたといふやうな事は實際の日常生活としては屢あることで、婆心録の考へは寧ろ偏狭である。勿論此の句を油をきらしシ體と解する説も昔から時々見えるのであつて、波鷗の七部集講義にも

「附意は發句灰汁桶の雫やみてきりぎりす鳴くを賤家と見立て油の貯へもなきさまなるべし」と言つてゐる。

それにつけても憶ひ出すのは、わが少時、ランプをつけてゐた頃のことである。箆に灰を入れて桶の上にのせ、その灰の上から箆一杯に水を張つておくと、灰汁が箆の目を通つて桶にしたり落ちる仕掛にして大抵夜の間に灰汁を取つておくのが、京阪地方の田舎家などの習はしであつたが、わたくしは、少年時に土間の隅においてある桶に箆から灰汁のポトンポトンと滴り落ちるその音にまじつてその桶の蔭に鳴くこほろぎの物佯びしいときれときれの聲を聞いた秋の夜頃を、「灰汁桶の雫やみけりきりぎりす」の句から、まざまざと憶ひ起すのである。そして中學の時分までつけてゐたランプの、

石油が切れて火の消えほそる時「石油差しを取り出して油を注がうとすると、それにも油が無くなつてゐて、而もわざわざ石油罐を開けて出しに行くのも億劫で、明日の豫習をも中止してそのまま宵寝してしまつたことなどを、また「油かすりて」の脇句から聯想するのである。

勿論、此の「油かすりて」の句には、氣らくなそして幾分無精な、超俗的な生活氣分が溢れてゐることを認めるべきである。

以上、わたくしの體驗が、連句の理解鑑賞の上に役立つた三例を示したのである。之れに反して、

木曾の 酢莖に春も暮れつゝ

の句の如きに於ては、「木曾の酢莖」がどんなものか食べた事も見た事もないので、充分此の句の味を知り得ない。京都あたりの酢莖とは違ふものであるらしいのである（昭和十四年八月二十四日しるす）



## ことばの問題と南九州

新 谷 恒 藏

小學校や中等學校において國語教育が大切である事はもはや動かす事が出来ないであります。この國語教育の基礎として一番大事なのは國語學、即ち國語の科學的研究であります。國語の今の有様、昔から今までの移りかはりの研究が國語教育の土臺になるのであります。しかし國語學が完全に研究し盡されるのを待つてゐる譯には参りませんから、出來ただけ少しづつでも利用し、これを肥料として國語教育を培つていかなばなりません。尤も國語學と申しましても範圍が非常に廣いございますし、國語教育にいたしましても色々な部門があるので、それらの一つ／＼について申上げる事は出来ません。それで只今は今頃割合に人から重んじられてゐない、殊にこの地方で輕んじられてゐると思はれるやうな事柄についてお話し上げたいと存じます。理想を申しますと、ことばの教育は母親に始まり自分に終るべきものかと考へます。ですから世のお母さん方に國語並に國語教育をもつと理解していただいて、國語教育の土臺石を力づくよく正しくきづいていただきたいのであります。又お母さん以外の、お父さん兄さん姉さんなど、すべての家族の影響も大變大きい譯ですから、かういふ家庭教育や更に社會教育も大事なのであります。今日は假に學校教育についてだけ申上げませう。九州方言が大分福岡の一部を除いては九州以外の人々に分りにくい、殊に鹿児島方言が大變分りにくい事は既に定評のある通りであります。生徒が修學旅行で東京に行つて買物が出來ず、先生に買つてもらつたなどといふ話は昔話と致し

ましても、それに近い事は今でも全くないとは申されませう。誠に情ない事ではありませんか。しかしかう申しましたからとて方言をいがいにおちこはさうと言ふのではありません。標準語が相當に話せる事は現代の日本人として必ずなくてはならぬ事であると同時に、標準語の外に方言に依る生活をもつ事は我々の人生を豊にし愉しくする上に望ましい事でありませう。又方言撲滅などは到底出来ない事でもありません。一方において國語の純化、正しくする事。單純化、簡單にする事。標準語化、國語に統一あらしめる事。強化、表現能力を盛ならしめる事が益々大切となりつゝあります。それは一面、近頃大陸に發展する我々日本人として、大陸に渡る一人々々の日本人が勝手な日本語を輸入してこれを彼等に學ばせたとしますと、さうでなくとも混亂しがちな我が國語は愈々混亂してしまひます。日本語の世界進出は已に支那事變の起る前から始つてをり、今日は日本語による世界文化征服をさへ夢みてゐる人もある位の時代となつてゐるのであります。我々國語教育者としても誠に愉快な働きがひのある時代であります。さて具體的にこの地方における國語教育の基礎として先づするねばならないものは一般國語學と並んでの方言研究であります。方言研究を行はないでは少くともこの地方の眞の國語教育は成立たないと思ひます。兒童生徒の現在使つてる言葉、その生徒のまはりの人々が始終用ひてる言葉を反省しないでことばの教育は出来ませう。まづ鹿兒島方言に限つて申上げますと、鹿兒島方言の研究は全國的にみてかなり進んだ方でありませう。今は出てゐませんが「方言」といふ雜誌に或る篤學者が毎年一年分の方言研究文獻目錄をまとめてのせてゐましたが、その中でも鹿兒島方言研究は目立つて多い方でしたし、私が五年前に或る論文集のために編みました方言文獻目錄を昭和十年三月に増補して鹿兒島教育にのせました増訂鹿兒島方言文獻目錄に載つてる項目だけでも二百七を數へる程であります。しかしこれでもまだ方言研究十分なりとは申せない事勿論であります。又これを土臺として鹿兒島縣の國語教育が發展させられてゐるとは言へませう。方言研究にも色々な方面がありますが、單語、語法、發音の三つに大體わけて考へて見ませう。單語として注意すべきは標準語と同一の單語であり乍ら意味する内容が異つてゐ

るために誤解を生ずるおそれのあるものが相當多い事であります。例へば「失ふこと」を「捨てる」と言ふこの言葉遣を誤解されたために首になつた小使さへあります。かうなると方言も笑ひ事ではありません。方言を使ふ人は勿論、方言を聞かされる人も或る程度の方言研究が必要でありませう。靴や下駄をはく、パンツをはく事を「ふむ」と言ひますが、かういつた事は數限りもないでせう。インテリ又はそれに近い婦人の或る集りの席で、「私たちは普通語を使ひがなりません。」と言つた婦人は、この文句だけは少くとも標準語で言つたつもりだつたらしいのですが、豈はからんや「使ひがなら」なかつたのであります。これは語法の一例にすぎません。チの濁りのヂとシの濁りのジ、ツの濁りのヅとスの濁りのズの區別が正しく出來るとか、クワの發音が正しいとか、發音の方面においてもいゝ所が澤山ありますけれども、なほ改めねばならない點も多々あります。發音だけでなく、單語や語法を反省する上から云つても外國語の一つ位は——(支那語でも何語でも)——完全に物にする事は可能でもないでせうが、師範學校や教員檢定試験にも相當課してゐるではないかと考へます。あまりに小さく固らない、大陸的な、大所から自分たちを眺めうる人物を作り上げるためにも必要ぢやないかと考へてをります。即ちをスナハチとよむなとか砂をズナといふなとか、さういつた發音の一々について述べる暇ありませんので割合輕んじられてゐる、或は誤解せられてゐるアクセントについて今日は主として申上げませう。平山輝男といふ方があつて國語アクセントを殆ど専門的にしかも全國的に調べてをられます。この方は南九州たしか都城の御出身のためか、まつ先に「南九州アクセントの研究」を發表されました。實地踏査の結果、南九州方言のアクセントは大體二通りあり、その境界線やその性質までかなり詳しく述べられました。私もこれより先昭和四年頃から此の道に、殊にアクセントの事にも手をつけ始めてゐたのですが、まだ實地踏査も余り出來ず通信による調査位しかやつてゐませんでした。しかし平山さんの御發表が大層立派なものである事を認める事が出來ましたし、又その反面自分の實地調査せる部分に僅乍ら誤ある事も發見いたしました。それらを綜合して、島の部分を除き、鹿兒島縣内のアクセント境界線を

申上げますと、大隈國贈喉郡南部の大崎町と西志布志村との境を大體流れてゐる菱田川——この川をすつとさかのぼる——これが大體兩アクセント、平山さんの所謂鹿兒島アクセント（右岸即ち西部）と日向アクセント（左岸、東部）との境界線を成してゐます。平山さんと私の違は、川口近くで境界線が東にそれる平山さんに反し、私は西に曲つて大崎町大字菱田を日向アクセントに入れる點にあります。兩アクセントの特徴は、釋迦に説法かとも思ひますが、日向アクセントは殆ど全部の單語が平板式アクセントでありまして、語尾をいくらか上げる——志布志などはその上げ方が著しいのです——一寸フランス語のアクセントに似てゐるやうに感じます。これに對し鹿兒島アクセントは大體において近畿地方に近いアクセントをもつてゐると言へませう。序乍らこゝで一寸九州の或る地方、主として熊本、佐賀の人々がよく言はれる「國語にアクセントなし。」について述べさせていただきます。それは平山さんの所謂「一型アクセント」——一つの型——例へばカとキとの二音節から成る單語ならば、木になる柿でも、海の牡蠣でも、垣根の垣でも、すべて同じやうに、少くとも發音者は區別しないで發音する——一型アクセントの地方に限られた事でありまして、日本全國一般の人々はアクセントありと感じてゐるに違ひありません。勿論英語のアクセントなどは全く性質の異つたものであります。九州方言のアクセントは、中國地方に近いアクセントをもつ福岡大分の一部を除いては、大體において四國地方と共に近畿系アクセントに屬するものと、少し大膽すぎますが、考へます。本州のうち残る中國地方と中部地方とは大體關東地方アクセントと同傾向と考へられます。東北地方については未だ自説をもちません。私は都合あつて今は英語教師をつとめてゐますが、英語教育にも志布志アクセント（日向アクセントの一分派）が非常に強い影響を與へてゐると信じます。フランス語だつたら又違ふかとも思ひますが。一般に國語教育の不十分が語學教育にとつて大變迷惑な事は勿論ですが、我々の生活全體に深いつながりをもつ國語をつよく正しく若き日本人の頭と心に植ゑつける事こそは最も大事な仕事の一つである事を確信いたしましたして、その基礎として、國語の科學的研究を大いにすゝめ、現代語の文法と信頼するに足る現代

日本語辭典と今の小學國語讀本よりも更に理想的な現代語讀本並にその模範朗讀レコードをも作り、特に鹿兒島縣では鹿兒島方言を益々研究していかねばならない事を申上げて、私のこの拙いお話の終といたしたいと思ひますが、最後に蛇足のやうですが、私の日頃の考への一端としまして、私が中國地方の産である事、(放送者がどこの産であるかは、ラヂオが國語教育の一大機關である事に鑑みて、アナウンスすべきものと信じます)、出来るだけ標準語と標準發音とを用ひてお話申上げようと努めてゐるものなる事をお斷り申上げ、最後までおきゝとり下さつた方々に厚い感謝を捧げ、御叱りなり御批評なりを賜りますやうお願いいたします。 さやうなら

(十四年三月十四日午前十一時)

これは志布志中學校在職中に鹿兒島放送局から放送する豫定で作つた原稿ですが、間もなく轉任のため果せなかつたものです。

(八、二七)



# 詞玉緒延約について

笹 月 清 美

詞玉緒延約は、岡本保孝の詞の玉緒致によると、玉緒の後、繰分と共に最も世に流布したといふことである。刊本三冊（上中下）で、著者については、一之巻の初めに、

幻裡菴主口授、筆受宇津忠重・渥美徳隣・御倉宜隆

と記してある。筆受の三人の連名になる凡例には、「師幻裡菴の聖」とあり、又、幻裡菴が書いたとすべき大意には、「桑門のをしへ子寛山・善静、俗子のをしへ子忠重・徳隣・宜隆」とある。三人は、幻裡菴の門下で、師の口授を筆受したわけであるが、なほ大意によると、幻裡菴は、十六年前に「破瞳」してをり、又、去年の八月から重い病氣になつてゐるのである。

幻裡菴がどんな人であつたかについては、芳賀博士の日本人名辭典に、

ニチゼン（日善） 僧。幻裡庵と號す。國語を能くす。安政六年四月九日寂す。年六十四。詞之玉緒延約を著す。

とあるのが最も詳しく、それ以上に記されたものを見ない。以下、延約の本文から傳記的の記載を拾つてみよう。

延約三之卷に、「こは故師久胤の考へ也」(六丁ウ)と記された所がある。してみると日善は久胤の門人といふことになる。久胤は、本居春庭の門人で、本居春庭門人録を見ると、その文政七年の所の冒頭に、

相模國大槻村 原新左衛門 久胤

と掲げられてゐる。日善の考へはこの久胤に負ふ所大なるものがあつたやうに察せられる。勿論日善は久胤を通じて、春庭の流れを汲んだらしく、更に遡つて、宣長を景仰し、

玉緒は古學ひらけてののちかゝる玉の玉たる寶のたからは世にたぐひあらしかじ猶これにうちならべて見もし學びもすべき書は詞の八衢にこそあなれかまへて我門生玉のをやちまたの二種の學びゆめく／＼なふこたりそ(大意の末尾)と言つてゐる。又、眞淵や守部の説にも學んだやうで、その引用がある。

日善の著書は、延約以外にもあつたらしく、この書の中に次のやうな記載が見える。

余が所著の當書の附録玉緒車(一之卷一丁ウ)

シラレザリケリの約まりたる也そをシラザリキとは言便と云ものにてそれらの事は愚考録にいひ置つ(二之卷十六ウ)

唱のよろしきを言便といひ聞えのよろしきを音便とはいふぞかゝる類例別記に委くいだす(三之卷六丁ウ)

牟をモの借字に用ゐる店をテモの借字に用ゐる類例はおのれが著せる万葉借字例をみてしるべし(三之卷八丁ウ)

これらの中、別記といふのは、さういふ名の別の著書なのか、それとも、或は愚考録などを指すのか、明らかでない。すべてこれらの諸書については明らかにすることが出来ない。

延約がいつ著されたかは、序文の日附も、刊記もなく明瞭を缺くのであるが、本文の中に次のやうな記述がある。

凡國語のてにをはは天然にて此義かゝりとしらでもおのづからに其境場に至る物なれば學ばずしても有なむ既にの

れ年久しく歌よみつれどこの玉の緒と云書を今よりは八年のむかし、五十六才にて、ぞ初めてみけるさるにてをを語遣ひ杯に大なる誤はなくしてぞ有けるさればとて味ひずして有べからむやは(三之卷九丁ウ)

これによると、この著述口授の時は、それから八年前が五十六才であるから、六十四才といふことになる。前掲、芳賀博士の人名辭典によれば、彼は六十四才で安政六年四月九日に入寂してゐるから、延約の成つたのは、その四月九日以前、即ち安政六年春といふことになる。

ちなみに、前掲、詞の玉緒攷には、

わが方外の友、東京丸山本妙寺和尚、今よりは十年已前に、詞玉緒延約といふ書三冊を著述して、本居氏の説のよしあしをいはれ、含てにをはとて云々

といふ明治八年六月十五日の識語がある(國語學書目解題による)。はたして日善が東京丸山本妙寺和尚なのかどうか、私はまだ確かめてゐない。又、十年已前といふのを文字通りにとれば、安政にはならないが、いかゞなのであらうか。

## 二

玉緒延約は、詞の玉緒に對して批判的な立場をとつてゐる。その批判の性質ならびに意義は、はたして如何なるものであらうか。

まづ初めに注意すべきは、テニヲハといふ概念の内容についてである。延約のいふテニヲハは、玉緒のいふ所と異なつてゐる。延約は、玉緒の三轉證歌の所の結び辭(紐鏡では留り)四十三に對して、

シ・キ・ケレ 此已下五段てにをは也(一之卷一ウ)

ズ・ヌ・ネ 此三轉はてにをはにはあらず上のかゝりによりてズヌネと活きたる也(一之卷三ウ)

などの批評を加へてゐる。即ち、延約によれば、

一から五まで テニヲハ

六 テニヲハにあらす 活きたる也

七 テニヲハにあらす

八から十二まで テニヲハ

十三から十七まで テニヲハにあらす 活語なり

十八から二十まで テニヲハ

二十一から三十八まで テニヲハにあらす 語格

三十九から四十三まで テニヲハ

である。而して、この批評は、「てにをは也」といふのが玉緒に對する養成であり、「てにをはにあらす」といふのが、玉緒に對する反對なのである。即ち、テニヲハにあらざるものを、活語もしくは語格とよび、「四十三段の中語格たる物をば除きつべし」(一之卷一オ)といつてゐる。

しかるに、玉緒は、これら四十三段の語を、係詞(即ち、テニヲハの本)たる、ハ・モ・徒(徒はテニヲハのないことに積極的意味を認めての名目である)・ゾ・ノ・ヤ・何・コンの結び辭(即ち、テニヲハの末)だとしてゐるのである。而して、結びといふ名目は、これらが上のテニヲハに呼應する機能に名づけたもので、それを文の構造の側から見れば、切る、所もしくは、とちめであり、又、語そのものの形態的側面から見れば、活らく、辭である。その活らきの中、ハ・モ・徒の結びとなるのは、切る、辭であり、ゾ・ノ・ヤ・何の結びとなるのは、つゞく、辭である。玉緒の認識は、このやうに明晰かつ整然としてゐる。これに比し、これを批評する延約自身のテニヲハに統一的な觀點があるかといふに、必らずしも

さうではない。前に表示したやうに、延約は、テニヲハと活語もしくは語格とを對立させてゐるが、テニヲハといふ中に、形容詞及び助動詞があり、テニヲハにあらざるとする中にも動詞の外に助動詞を含んでゐて、テニヲハと然らざるものとを截然と分つ規準は、品詞の別ではない。又、「かゝり語なきをもててにをはとはすべからぬ事也」(二之卷一オ)といつてゐる所から見ると、上にかゝりの語があれば、すべてテニヲハかといふに、さうではなく、ズの場合のやうに、上にかゝりの語があつて、ズ・ヌ・ネと活いても、テニヲハではないのである。

しかし、もちろん、延約には延約自身の理論がないのではない。含テニヲハ・含語・疊語・約語・拘語などの名目がそれで、よつてもつて玉緒を批判するのである。

延約が、玉緒における結び辭を、テニヲハとしからざるものとに分けたことは前に述べたが、その規準はどこにあつたかといふに、これも前に述べたやうに、上にかゝりの語のあるかないかが第一の要件であつた。そこで先づ徒の桁が問題となる。延約によれば、ハ・モのない徒の桁には二つの場合がある。解釋者がハ・モを補ひ得る場合と然らざる場合とで前の場合にはその結び辭はテニヲハであり、後の場合には、それはテニヲハではないのである。而して、補ひ得るハ・モを、それは本來その歌の文の内に含まれてゐるもの、乃至、含められてゐるものと見て、含テニヲハといふのである。

總じて、含テニヲハといふのは、いま云ふやうに、歌の文面には現れてゐないが、內的に文中に含まれてゐるもので、読む者の側で、補ふべきもの、即ち、餘情・餘意である。

わび人の袖をやかれる(△ラム) 山川はなみだのごとく落る瀧かな  
の歌について、

是もラムの含てにをはにて袖をやかリテアルラムなり(一之卷七オ)

といひ、又、

秋山のもみちをかざしわがをれば浦しほみちくいまだあかなく  
の歌について、

ハモの語含まりたる所なし是クはてにをはにあらざるの證なり(一之卷八ウ)

といふのである。含語また含句といふ名目もあるが、それも含テニヲハと全く同様である。

次に、疊語といふ概念の内容は、次のやうである。疊語といふ名目が用ゐられたのは、たとへば、

後瀬山のちもあはむと思ふにぞしぬべき物をけふ迄もあれ

の歌について、

此ゾはコソと云語のたゞまりてゾといへる也是を疊語のゾといふ(二之卷十二オ)

といふやうな場合で、その他、

テバはテアラバのアラバをバと疊たる也(三之卷四オ)

バはアラバの疊語なり(三之卷五オ)

シはマシの疊語(三之卷十四オ)

などである。即ち、語の一部分が略され、その部分の意味が残りの部分に疊込まれてゐるものといふやうに考へてゐたら  
しい。従つて、

トテモはトアリテモの存略也(三之卷九オ)

とある存略もこれに當るであらう。

約語といふのは、これと異なり、音のつゞまりである。而して、つゞまつて出来た音にもとの語の意味が宿つてゐると  
する點、疊語と同じである。たとへば、

さきだちて萩の下葉もいろ付ぬおくれ秋はいづくまできぬ。(ヌラム)

を玉緒が變格としたのに對して、

此一種も變格にあらず約語なり(二之卷八オ)

といひ、又、

物ごと忘れかたみをとぢめ置て泪のたゆむ時のまもなき。(クアリ)

を、玉緒が「てにをは不調歌」としたのに對して、

こは時のまもナクアリにてクアリの約めキなればかくも留れり(二之卷九オ)

といつてゐるのなど、これである。

この外、拘語といふのがある。玉緒が、二之卷の冒頭に、「留りより上へかへるてにをは」と題して、ハ・バ・モなどからマデ・ナガラ・モノカラなどに至るテニヲハを説いたのに對して、

かゝり語なきをもててにをはとはすべからぬ事也亦この下に擧られたる種々は結びの語にもあらず今あらたに名をたてば拘語と唱ふべし拘ゆるに上をかゝゆと下に意の残れるをかゝゆとの二つあり(二之卷一オ)

といつた。こゝにも、テニヲハ概念の混亂があるが、これは、歌の結句の最後のテニヲハが、上にかへり、もしくは、餘情を残してゐる場合なのである。拘語は、文面に顯れない含語のこともある。

### 三

延約は、以上のやうな觀點から、玉緒を大きく改訂しようとした。即ち徒の桁及びヤ・何の桁を除かうとしたのがそれである。

徒の桁については、かういつてゐる。徒の桁は、もし、ハ・モの含テニヲハがあれば、それは、實はハ・モの桁の變格であつて、含語含テニヲハの部類とすべく、もしまた、ハ・モの語を含んでゐなければ、それは語格であつてテニヲハではない、従つて、何れにしても、徒の桁は除くべきである、といふのである（一之卷一オ）。

けれども、徒の桁は、終止形で結ぶ場合の一方式である。而して、たとへ含テニヲハがあつてもなくても、その文面は同じなのだから、それを、テニヲハと語格とに分つて考へるのは、全く含テニヲハの觀念に誤られたものといはねばならない。又、延約は、ハ・モを含テニヲハとして持つてゐる場合のみならず、徒の桁の全部を、ハ・モの桁の變格と見る考へを、二之卷の初めに述べてゐる。即ち、ゾ・ノ・ヤ・何がなくて連體形で結ぶ場合をゾ・ノ・ヤ・何の變格といふなら、ハ・モがなくて終止形で結ぶ場合も、ハ・モの桁の變格であるといふのである。けれども、國語では、ハ・モのないのをむしろ常態とすべく、終止形の結びはこれに應ずるもので、それを變格といふのは當つてゐない。結びを基準に考へる時、玉緒がハ・モの桁と共に徒といふ桁を設けたのは頗る妙味のある所である。

ヤ・何の桁については、ヤ・何の結語は、ゾ・ノの結とは意味が違ふから、ゾ・ノ・ヤ・何と一括して擧ぐべきではなく、かつ、ヤ・何の下には、約語・含テニヲハ・含語があつて上へかへる歌もあるので、このヤ・何の桁を除いて別にした方がよい、といつてゐる。かくして、かゝりのテニヲハについて右中左の三轉をたてるなら、ハ・モとゾ・ノとコンとの三桁に規則をたてるべきであるとする。しかし、ヤ・何がゾ・ノと異なるといふのは、意味の上のことで、語法的な機能においてではない。殊に、延約は、たとへば、

しら波のこゆらむ木のまつ山は花とやみゆる春のよのつき  
について、みゆるはみゆラムの約語だといひ、（二之卷十二オ）、又

わび人の袖をやかれる山川はなみだのごとくおつる瀧かな

について、かゝるはかゝるラムの含テニヲハだといふなど（一之卷七オ）、ヤ・何の下には、約語や含語が來るとなし、ヤ・何の結びは連體形ではないとする。いふまでもなく、それらは、解釋むしろ口譯に際して適宜に補はれる語で、文がその成立に必然的に豫想してゐるものではない。文はそれらなしに完結した表現をなしてゐるのである。文にない語によつて文の法則をたてることは誤りであるといはねばならない。

總じて、延約のいふ含語・約語・疊語は、文及び語に必然のものではない。解釋に伴つて適宜に附加されるもので、従つて、それらを材料としてなされた玉緒に對する攻撃は、全一的をばづれてゐるとしなくてはならない。延約が玉緒の到達した法則性からこのやうな謬見に轉落したのは、要するに、その語法意識が明晰でなく、特に、研究方法がまちがつてゐたからである。

（昭和十四年初秋）



# 甌島方言の音韻に關する報告

上 村 孝 二

甌島方言の音韻に就いては、已に宮良當壯氏が實地踏査の結果を「國學院雜誌」(三七ノ一及二)に出してをられる。併しながら、氏の調査範圍は上甌島の北部の里村と下甌島の最南端の手打、同島西南の片野浦・瀬々野浦に限られてゐて、全部落に亘つてゐるわけではない。私は昭和十二年の夏アクセント調査の目的で大方の部落を巡つたが、その際宮良氏の踏査されない地域において、特色のある發音を聞いたのでそれに就いて報告して置きたいと思ふ。目的が目的だから音韻全般についての觀察はしてゐないから、方言調査上大事な事項を注意してないかも知れないが、今回はただ宮良氏の論文に見えない異色の音韻の存在することをお知らせするに止め、傍、氏が軽く取扱つてゐられるものに就いても色濃く分布してゐるものは附記しておきたい。

(一)イがエに變化すること 下甌島の北端にあつて中甌島に近い<sup>イナダ</sup>蘭牟田では子音を伴はない單獨のイはエに發音されてゐるので、東北方言の特徴と思ひ合せて大變珍らしく思つたのであつた。原則として語頭のイに就いての現象であるが、熟語に於ては語間でもエに變ずることがある。エダ(板) エシ(石) エド(糸) エグ(行く) エギ(息) エナガ(田舎) エロ(色) ハラエツペー(腹一杯) ジャガタラエモ(馬鈴薯) 等々。併し全然イが無いのではなく印、位はエにならず、針、羽

織、日和などは他の部落と同様訛音ハイ、ハオイ、ヒョイである。この音韻變化は甌島では此處だけであり、又若い者からは次第に聞かれないやうになりつゝある。

(二)濁音化 右のエダ、エド、エダ、エナガで分るやうに語間語尾のカ行音タ行音の濁るのが蘭牟田言葉の一特徴である。併しこれは上甌島の僻地瀬上セガミにもある。但し瀬上ではタ行音はダ行音になり更にラ行に變つてゐるのが蘭牟田と異つてゐる。

#### カ行音の例、

アガガ(赤い) オギル(起きる) ネゴ(猫)〔瀬上・蘭牟田〕

オーダ(桶)〔瀬上〕

オダ〔蘭牟田〕

カーギ(柿)〔瀬上〕

カギ〔蘭牟田〕

サダヤ(櫻)〔瀬上〕

サダラ〔蘭牟田〕

#### タ行音の例、

○牟田では、アダマ(頭) カダ(肩) クズ(靴) オド(音) オドコ(男) ケーデ(書いて) シエーダ(咲いた) であるが、瀬上では、夫々、アラマ、カラ、(クツは清音のまま)、オロ、オロゴ、ケーレ、セーラとなつて居り、他村の者から瀬上言葉は解らないと云はれるわけである。それから蘭牟田では、チ、ツは濁音化しにくく、瀬上でもツは稀であつて私はマズイ(祭)を聞き得たのみであつたが、チは容易に濁る。その場合はチでなくジである。

マーヅ(町) ターヅ(質) ミーヅ(道) シジヤ(質屋) ヒバーヅ(火鉢) ポラモーヅ(牡丹餅) 兎に角この濁音化の傾向も東北方言を思はせるものがあり面白く感じた。

(三)ガ行鼻音の存在 濁音化の行はれる瀬上にはこの發音が聞かれた。そして土地の人々は、清音から轉じた〔g〕と識別してゐるのであつて混同しないのである。

ホンカ(本が) ハカマ(釜) ニキーメシ(握飯) スーキ(杉) ハマガイ(蛤) ハケアラマ(禿頭) オナコ(女) タマゴヤーキ(卵焼)

この部落の小學校の訓導が言つてゐたが、一年生にタマゴを讀ませるとタマコといふので、矯正しようとするれば、タマゴと發音出來ずタマモとなつてしまふといふ事であつた。

この鼻音が行はれてゐるのは、甌島では瀬上だけであるが、九州方言には珍らしいから報告して置く次第である。尤も九州方言においても調査の結果少しづつ増加して行くらしい。「鹿児島教育」(昭和八年八月)において福里榮三氏は「ガ行鼻音は關東以上には普通の音であるが關西には少く九州には極めて尠い、宮良氏の報告によれば枕崎、喜界島與那國島の三箇所にはかないことになつてゐる。然し枕崎の外に額娃村、喜入村、山川町の大山、兒ヶ水にも存在してゐる。」と述べてゐる。

(四)ハ行唇音の存在 宮良氏の報告に下甌島の南部について「ハ(葉)を手打の老人はファといひ、日をファイ、ヒヨリ(日和)をフイヨイ、ヒツジ(未)をフィツジ、ヒシオ(干汐)フィシオ(手打、片野浦、瀬々野浦)といふ」とあり、私も同島の青瀬で老人がヒをフイといふのを知つたが、それよりも驚いた事には上甌島の瀬上では、ヒばかりでなくハ行子音は全部〔f〕であり、而も古老に限らず中年以上の社會ではこれが普通なのである。

ファ(葉) ファナ(花) ファイ(針) ファマ(濱) フララゲ(鼠) ファイ(日) ファゲ(髯) フイヨイ(日和) フゴ(袋) フタ

イツ(二ツ) フネ(舟) フエ(屁) フェンゴ(へぐろ・鍋墨をいふ) フェラ(へた・陸にちかい海) フオ(帆) フオネ(骨)  
アフォー(母の意) ファン(本)

但し、フフ、フイが最も多く、フ(Fu)は極少い。又、當時二十九歳になるある男の發音では、濱、骨、へたは[h]であつた。年少者からは段々聞かれなくなつて來てゐるらしい。當時この部落の小學校の教師をしてゐた知人が言ふには、自分はこの唇音に最近まで氣附かないでゐたが、或る日妻が「此處の小母さん達は妙なことに花をフナと云ひますよ。」と話したので、「そんな事があるものか、お前の聞間違ひだよ。」とその儘濟ませてゐたとの事であつた。

私は九州方言に痕跡しか認められないといふこの古音が甌島の一隅に現に話されてゐるのを發見し茲に南島方言との繋りが出來たやうに思つて大變嬉しかつた。

(五) [d] ↓ [r] ラ行音がダ行音に轉することは、九州南部の傾向で甌島でも行はれてゐるが、逆にダ行音がラ行音に變化するのも多い。これに就いては宮良氏は軽く取扱つてゐられるから、私はこの傾向のあることを強調しておきたい。上甌島の小島・中甌島(平良のこと)、下甌島の長濱がそれであつて、殊に長濱では原則的にダ行音はラ行音に發音する。又ザ行音もラ行音になる。今長濱の例を挙げると、

ケラモン(獸) ハラカ(裸) レーコン(大根) オロイ(鮪) センロー(船頭) ヤロ(宿) コロモ(子供) ミル(水) フ  
リ(藤) ミカルキ(三日月) ソイラー(それでは) ロツチ(どつち) ヒロカ(ひどい) タケラオ(竹竿) アマラケ(甘酒)  
リーサン(爺さん) カリ(火事) ネルミ(鼠) ウーカレ(大風) カラウ(飾る) レカケウ(出掛ける) ハリムウ(始むる)  
等々である。

(六) [ɾ] ↓ [y] この音韻變化は宮良氏も下甌島の瀬々野浦、片野浦にあることを述べてゐられるが、私の氣附いたところは、その他に下甌島の青瀬・長濱、上甌島の小島・瀬上にもあり案外分布が廣い。殊に瀬上のそれは顯著である。瀬上の

例だけあげて置かう。

サクヤ(櫻) サヤ(皿) ハシヤ(柱) トゴヨノゴヨ(所々) ムヤサキ(紫) ウエーカ(嬉しい) クヤカ(暗い) フヨ(風)  
呂) ハタヤーク(働く) ナヨ(習ふ) コヨス(殺す) アラーユ(當る) カザーユ(飾る) ハユーユ(腫るる) ホユ  
ユ(惚るる) ナガユーユ(流るる) ハジムーユ(始むる) シマユーユ(生るる) イワユーユ(謂はるる) これ等の中で動  
詞の終止の末尾のルが判然ユになつてゐるのは珍らしい、[r] [y]の變化のある他の部落でもこれだけは大抵イになるか、  
[r]の脱落が行はれぬするのが普通であるから。この音韻現象は南鹿兒島方言にもあるやうに記憶するが、我が上代の國語  
の姿を思はせるものがある。

(七) [d] ↓ [n] 瀬上言葉は [d] ↓ [r] の變化の型を破つて、ダ行音(ザ行音とも)に十行音に轉訛する特徴があつて、理解に困難である。

ケナモン(獸) アイナ(足駄) トーナ(飛んだ) フニ(藤) オニ(叔父) ソネ(袖) ウネノケー(腕時計) アマノー(雨  
戸) デークノン(大工どん) キノノーグ(氣の毒) ノヨ(泥) ナガシノーギ(梅雨時) メシノークサガ(面倒臭い) カ  
ニ(火事) キーニ(雉子) ミーニ(水) クーニ(葛) スニムーシ(鈴虫) ネニユーミ(鼠) マニエル(混ぜる) ウーカ  
ニ(大風)

ニ、ニエの拗音が表はれるのは、他の村で、ズ・ゼがジュ・ジエとなる傾向があるからそれが變化したものである。

逆の [n] ↓ [d] がないかと訊いてみたが、「松の木」をマッドーキといふだけで他の語彙にはきかれなかつた。[n] [d] の相通は國語方言では餘り報告がないやうだから参考になれば幸ひである。

(八) [g] の脱落 清音 [k] の脱落は國語に多いが、[g] の脱落は音便の場合にあらはれるのみで、一般的でないと思ふから、甌島にこの現象のあることを書添へておかう。

中甌島〔平良〕では、

鷗 カオメ (カゴメ||里村)

蠶 キャーオジョー (キャーゴジョーの轉)

お手玉 イシナオ (イシナゴの轉)

仕事 シオト

梅雨 ナアシ (ナガシの轉)

ごとある オトアル (九州方言、何々したい、何々のやうだの意)

下甌島蘭牟田では、

小刀 コアタナ

女子 オナオ

流るる ナアルル

などを聞いた。

以上断片的な報告になつて了つたが、これ等の音韻變化がどちらか云へば甌島全村に亘るものでなく局部的に偏在してゐるのが物足らなく思はれる。併しそれが甌島方言の特色をなしてゐるといふべきであつて、全島に通ずるものは、結局九州方言の特色となつて表はれるであらう。思ふに甌島は山地が多く平野はなく山峽に漁村を營んでゐる感じであつて、九州本土との交通は固より島内の交通も不便であつて見れば各部落は孤立的な存在を續けて來たのであるし、その間各々部落獨特の音韻を發達させたものであらう。殊に上甌島でも最も僻地である瀬上に異色のある發音の存するのは自然であらう。

# 石山寺本「大般若經音義」殘缺の倭言に就いて

平 井 秀 文

石山寺一切經藏に傳はる大般若經音義に二種あり、その一は長寛三年の識語を有し、表紙には大般若經音義とあるが内題には大般若經字抄とある古鈔本で、特に國語を注すること多きを以て知られてゐる。その二は即ち茲に述べる殘缺本で、大般若經音義の中卷だけ而もその卷首若干を缺くもの、これは特に小學方面の研究に好資料たるものであるが、僅かながらも萬葉假名で國訓を注したものがあり、上代の國語資料の一として貴ぶべく、これに就いて少し述べる。

この古鈔本は現存一卷、初缺とはいへその末尾に「大般若經音義中卷」とあるによつて、原は上中下の三卷から成るものたるべきは明かである。全長二丈餘あり十一紙を以て成る無軸の卷子本で、所用萬葉假名によつて考へるに奈良朝末期頃の撰と認むべく、その原本たるか轉寫本たるかは斷じ得ぬも、書風を推すにやはり奈良朝のものとするに不可なく、後れても平安朝初期は絶對に下らぬであらう。

撰者は不詳である。かの本邦の學僧信行の撰に擬することも一往は考へられるが、これを證すべきなく、但し萬葉假名を用ひて國訓を注するより觀て、本邦人の手に撰ばれたものたるは疑ひない。その内容を概觀するに、かの支應の一切經

音義に所收のものと注文の相通するもの少からず、他書を援用するに於いてはその書名を省き、又玄應の注文を削減した如き感をもあたへる。尤も玄應のと全く異なるものも少くないが、その關係の全くなきものとは認め難い。玄應には別に大般若經音義三卷の撰があつたことはその名傳はり、現今佚書となつてしまつたやうであるが、間接か直接かの關係は斷じ得ずとも、その佚した三卷の意義を基として、これに本邦人の手によつて然るべく成つたのが本音義であらうかと推定する。要するにこの成立並びに内容の研究は、小學の方面に貴重な資料たり得るが、今は倭言に就いて述べるので、これらに關しては右に止める。

## 二

まづ倭言を含む條をすべて擧げよう。注文は現存全部で二百三十餘條のうち、倭言を注するものは左の十二條を數へるにすぎぬ。三卷とも殘存するならば、恐らく他にも今少し倭言を知り得るであらうに、惜しい。

### 第五十三卷

骨隨 下宜累反骨中脂也 倭言須尼

汗淡 上音干 倭言阿西

### 第一百八十一卷

疥癩 上公辨反夏有瘡疥之疾又疥癩也下力帶反又力蓋反惡疾也瘡餘委反倭言加由之瘡先勞反疥也

### 第三百卅二卷

箭括 下古活反(會)也又省視也又松類也非此正要 信言箭波受

### 第三百卅九卷

危脆 下清歲反易斷也 倭言母呂之

第三百八十一卷

〔織長〕 思康反織小也細謂之織 倭言蘇毗加牟

〔肺〕圓 又作傭字勅龍反傭均也齊〔等也〕 倭言麻利々加牟

輻輪 上甫〔菊〕反下力均反車脚也又猶名車爲輪輻 倭言車箭也

鞞 上又作桐字无枉反倭言車乃大倭下公木反 倭言車乃飴也

〔稠密〕 直流反稠直如髮曰多也稠密 倭言伎比之

〔眼〕睫 下又作映子葉反目旁毛也 倭言麻都奇

眼睛 且頂 眩睛也眩音亡頂反眩睛也 倭言麻那古

右のうち〔〕を以てせるは原本缺損したところ、文字を充てたのは慧琳の音義等によつて該當箇所を埋めたので、〔〕を以てするは原本の字の篇に缺損あり、旁だけを示したものである。なほ第三に挙げたところに信言とあるは倭言の誤たるは著しく、蓋し下字の言字に引かれてその旁を誤つたのであらう、これらを以て轉寫の際の誤寫と考へれば本音義は原撰本ならぬを認むべきであるが、かゝる誤は原撰者に於いても必ずしもなしとせぬ例であるから、いづれとも斷ずるは早

す。なほ、右の倭言に用ゐた萬葉假名を表示すると次の如くで、數字を以て注したのはその字母の使用せられた回數を示す。

- ア 阿
- カ 加 3
- キ 伎
- ゲ 奇
- コ 古

シ之<sup>3</sup> ス須・受 セ西 ソ蘇

ツ都

ナ那 ニ尔<sup>2</sup> ネ尼 ノ乃<sup>2</sup>

ハ波 ヒ比・毘

マ麻<sup>3</sup> モ母

ヤ箭 ユ由

リ利 ロ呂

ワ倭

外に車點に「ム」が用ゐられてゐる、假名にも車點符を用ゐるのは、古く佛足跡歌にも例がある。濁音を表はす文字は前掲の倭言によつて明かであり、なほ本音義の倭言に用ゐられた限りに於いては、かの特殊假名遣の兩類の分別も誤らず使ひ分けてゐる、便宜上これに關係ある倭言だけを甲乙兩類に分けて示す。

(甲類) 蘇・毘・加・爾・伎・比・之・麻・那・古

(乙類) 母・呂・之・麻・都・奇

三

この假名字體に就いて觀るに、やはり大體は當時通用のものであつたことはわかる。そのうち少し注意すべきものがあるので、これに就いて一言する。

「箭」字は「箭<sup>ヤ</sup>ハズ」の際は正訓として用ゐられてゐるが、「車ノヤ」に用ゐるは正しく借訓の假名として扱ふべきで

あらう、かゝる借訓の用法は珍らしい。なほこれは一字一音の例ではないが、「甞」字を「車ノコシキ」に用ゐてゐるのも、一字三音ではあるが、正しく借訓用法の珍らしい例に數へねばならぬ。

「倭」を「ワ」の假名に用ゐる例は、書記・風土記には見えるやうであるが、他の古文献では「ワ」には「和」を用ゐるのが殆んど固定の用法であつた。

「西」「尼」は奈良朝及び下りても用ゐられてゐるが、記紀以前の文献に稀に見え、古音假字として注意せられてゐるものである。

加西・溢カセイなるべし (天壽國曼茶羅繡帳銘)

伊久牟尼・利比古大王 (上宮記逸文)

伊奈米足尼 (天壽國曼茶羅繡帳銘)

斯多禰足尼 (山名村碑)

「奇」字は「毛」の假名に充てられたものであるが、これは貴ぶべき古音を傳へた例である。「奇(奇)」は推古朝遺文では「カ」・「ガ」の假名に充てられたのも、極めて古音を傳へたものであることは周知のことで、

巷奇名伊奈米大臣・巷奇伊奈米大臣・巷奇有明子大臣 (元興寺丈六釋迦佛光背銘)

止與弥舉奇斯岐移比彌天皇 (元興寺丈六釋迦佛光背銘)

巷奇大臣名伊奈米足尼 (天壽國曼茶羅繡帳銘)

これは奈良朝以降「ギ」の假名に用ゐられてゐるが、この「ゲ」の音に充てられたのは、「奇」の古音から近代音に移る中古音を傳へたものとして注意すべく、文献上に於いて「奇」がかく「ゲ」に用ゐられた例は他に未だこれを知ることが利來ぬ。かの「宜」が推古朝遺文では「ガ」であり萬葉集では「ゲ」・「ギ」兩音に用ゐられ、古音「ガ」から中古音「ゲ」更に近代音「ギ」となるを明かに示してゐると正しく同じ例である。

語彙として二例を注意しておく。その一は「蘇毘加爾」である。後世の字書等に「ソヒヤカニ」の語は珍しからぬが、かく「ソヒカニ」とハふ語例は未だ見出でぬ。然るよりすればこれは「ソヒヤカニ」の「ヤ」音が脱して成つた語の如く見える。或いは本音義は前述の如く轉寫本なりとの前提を以て臨めば、その轉寫の際に書き落したものとやうにも思はれる。但しこれらは共に認めるところではなく、むしろこの「ヤ」なきが古語を保存する形なるべく私考する。

次に「麻利々加爾」である。「マリリカニ」の訓も後世の字書・訓點物の傍訓等に珍らしからぬもので、然らば何の疑ひもないが、「利」を古音「ロ」なりとする説によつてこれを訓めば「マロロカニ」となる、これ後世「マロラカニ」なる語と同じものと認められる。これに従ふと、後世の「マリリカニ」なる訓は、この「利」が古音「ロ」なることに無知であつた爲に生じた誤讀と認めねばならぬ。果して如何。大矢博士はその著「假名源流考」のうちで、「利」は「リ」に、「理」は「ロ」に上代は使ひ別けられたと力説せられてゐるが、これらの説には關係なく、私は今のところやはり後世の例のまゝに「マリリカニ」と訓んでゐる。

この殘缺本の姿に接したのは正に三年前、曾て大矢博士が原本の倭言を含む條を主として影鈔せられたものを、再び手鈔したに始まる。原本に懂れて翌十二年春石山寺に到り、これを査べて大矢博士の抜かれた以外になほ一條倭言のあるを知つた、疥癩の條がこれである。同年秋更に石山寺を訪ね、打續く雨の數日を費して全卷を謄寫し、歸りて副本一部をも作つて研究の資に供した。それから、岡井慎吾博士が本音義をその専門の小學の方面から研究せられた稿があることを、こゝに附記させていたゞかう。

あれからまる二年、遠からずこの音義も複製せられて世に出るを思ひあはせ、かの副本を座右にするを除いては、たゞ一部の參考資料さへなき僻地の假寓に孤り身を寄せつゝ、同じく秋雨を聽いてこれを草する、まこと懐古の情に堪へぬ。

昭和十四年秋十月十日稿

## 筑紫路の菊舎尼

藤野邦雄

一字庵菊舎尼——長門國長府の産んだこの女流俳人は、その生涯の過半を旅に送つた漂泊の俳人であつた。西に東に彼の女の印した足跡のうち、九州に於けるそれをたどつて、彼の女の人及び藝術の一端にふれてみよう。

寶曆三年長府藩の御側役人田上由永の長女と生れ、十六歳の時長府の農家村田氏に嫁した彼の女は、安永五年二十四歳で夫に死別した。

余若うして夫にはなれ、家に緒つぐ子なければ、ゆかりある人の子を養子して、家計の事共まかせ譲りし、今は浮世に暇あく身と成りぬれば、天が下の名にあふくまふ、神社佛閣を拜詣せばやと、思ひ立つ日を其儘に、ひとり旅路におもむきぬ。

月を笠に着て遊ばゞや旅のそら

と、その著「手折菊」開卷の文字に彼の女の旅の記録が始まる。かくて、安永九年飄然として故郷を出た彼の女は、萩の清光寺に於て得度を受け二十八歳の黒髪を斷つたのであつた。それから京阪に赴き、安永十年美濃に入り、獅子門の宗匠是什坊傘狂を尋ねて入門し、更に北國奥州の旅をつゞけて江戸に着き、此處に留まる事三年、天明四年の歳暮長府に歸つ

た。二年を故郷に送つた彼の女は、天明六年（三十四歳）の夏、筑紫路をさして行脚の途に上つた。美濃の俳友細竹庵白茶坊とうちつれての旅立であつた。

何もかゝで渡る硯の海すゞし

豊前豊後を経て、初秋の頃筑前に入つた。

思ひ出や千代の松原にけふの月

と、良夜に箱崎の月を賞して感慨にふけてゐる。神無月の頃肥前佐賀に移り、此處で百茶坊と別れて長崎に赴いた。

ひとり着て其誠しれしぐれ笠

と、百茶坊は一人旅行く菊舎に廬してゐる。長崎瓊の浦わに於ける風雅の交りに年の暮るゝも忘れて此の地に天明八年の春を迎へた。その後百茶坊と再び相つれて肥後に遊び阿蘇山に登つた。

つゝじばかりもえ習うてか阿蘇の山

かよはい女の足には阿蘇登山は可成の冒険である。しかも、かつての太行脚に於て、信州姨捨山の夏の月を賞せんとし、て山中に大雷雨にあひ夜もすがら岩のはさまに身をちよめて佛を念じ夜明けて里の農夫に救ひ出された彼の女、行暮れて道を失ひ終夜笠に降る落葉の音淋しい奥州二口越の山中をさまよつて鶏鳴の頃やうやく人家にたどりついた彼の女である事を思へば、この阿蘇登山も物の數ではなかつたであらう。

かくて第一回の九州旅行を終つて長府に歸つた菊舎は、故郷に席の暖まる暇もなく、美濃に江戸に京都に雲水の客となつて風雅の誠を探つたが、寛政八年（四十四歳）再び九州の地を踏んでゐる。この時の旅は俳人との往來のみにとどまらず、詩人儒者と交遊してゐる。先に彼の女が江戸再遊の節さる人から七絃琴を贈られ爾來七絃琴は彼の女の行脚につねにたづさへられて、これによつて支那趣味を鼓吹され漢詩に對する興味を起したのである。漢詩に入るには先づ華音の研究

からといふので、長崎に於て平野某から華音と漢詩とを學び、器用な彼の女は早速詩を作つて清人蔣菱舟、費晴湖と詩の應酬を試みてゐる。

獨抱雲和遍九州 仙風道骨傲王侯

揮弦徽奏綺闌操 流水高山孰與儔

丙辰歲客遊崎陽聞長門有女子菊舍者善鼓七絃琴兼工於詩高尚其志獨携古琴周遊歷國遍訪名山勝概其胸懷曠達淡然無所營不以爵位屈其志不以財利動其心飄然世外如閑雲野鶴無定跡也古人云歸眞反璞身不辱在士君子猶難其人況于閨媛而能瀟灑若是古今所罕有也茲以琴衣屬余書因題一詩並爲之序以紀其勝事

これは費晴湖が菊舍に贈つた詩並序であるが、彼の女の人格を親ふべき好資料である。たま／＼長崎名物ペーロン競争の行はれるにあひ詩を賦し、又

わたる跡はもとの海なり競ひ舟

とよんでゐる。肥後に入つて白川のほとりの客となり檜垣老女を憶つて詩を賦し、又

すむや秋白川の水に面影も

とよみ、中秋熊本の月を賞して詩を賦し、又

何處へ遊ぶ身に旅はなしけふの月

とよんでゐる。熊本に於て彼の女が交遊した詩人儒者は、村井琴山、有馬白嶼、安東節庵、辛島鹽井、李紫溟等である。筑後久留米に於て詩人樺島石梁と交遊し高良山に登つて

照るや葛夜は玉だれの峰の月

とよんでゐる。筑前太宰府の竈門山に登つて詩を賦し、又

これが残る小春の木々や竈門山

とよんでゐる。故郷への歸途について小倉の近くで冬至にあひ

雲水のくもみて急ぐ冬至かな

とよんでゐる。旅の感慨がしみくくとよまれてゐて菊舎中の佳作であらう。二年にわたる九州旅行を終つて長府に歸つたのは寛政九年（四十五歳）の歳暮であつた。さすがになつかしい故郷の山々が、漂泊の俳人を迎へてくれた。

眠る山やわれは筑紫の旅戻り

それから數年間は、長門國內の小旅行位で大旅行は行はれて居ない。俳句、漢詩、和歌、音樂、書道、繪畫、茶道、行くとして可ならざるなき菊舎の名は愈々高く、風流殿様として有名であつた。長府藩主毛利元義の御覺えめでたく御前に召される事も屢々であつた。享和三年十月（五十一歳）菊舎は三度九州に渡り翌文化元年の夏まで筑前の地に暮してゐる、儒者龜井南冥、南冥の弟で崇福寺の住職なる曇榮禪師等と交遊唱和してゐる。

絃に叶ふ冬や袖の濱の松

南冥と早良郡あごめの濱に松の木がらしを聞いた時の句。

世の外のしらべごころや年の松

曇榮を崇福寺に訪ねた時の吟。

春風生紫海 遠客獨從容

帝子降誕地 森然千載松

これは箱崎春興と題する五言絶句。これに

ひかで遊ぶ子日や千代の松原に

の句を和してゐる。

翌文化二年（五十三歳）の初冬藩主から琴士の着る鶴毳裘を賜はつたのでこの光榮を九州の諸先生に吹聴し且又太宰府天満宮の神前にこの袖を翻さうと俄かに思ひ立つて四度九州に渡つた。

往て來うか鶴に紛れて雪千里

文化三年の正月歸郷してゐる。これが最後の九州旅行であるが、爾後菊舎は相も變らず各地に旅し京阪には再三上つて居り文化九年六十歳の時「手折菊」四卷が京都の書肆から出版された。文政九年、七十四歳で故郷に歿した。

以上あげ來つた菊舎の句を見ても分るやうに、彼の女を俳人として第一流の地位に推す事はもとより出來ないであらう。俗談平話を旨とした田舎蕉門美濃派の狭い天地に住み、又漢詩、和歌とその才藻に任せて筆を弄し過ぎて俳諧のみにその天分を集中しなかつた菊舎の句が、多少安易平板に傾いた觀のあるのはやむを得ないことであつた。然し由來女流作家の寥々たる俳壇に於て彼の女の如き特異な作家を見出す事は、俳諧史上の一異彩と云ふべきであらう。男子をも瞠若たらしめるものは、諸國にあまねき彼の女の足跡である。旅に生き旅に死ぬを念願した乾坤無住獨歩の行脚である。由來俳人にして行雲流水を友とした人は頗る多いのであるが、その行脚が自己宣傳のそれであり生活の方便のそれであつて、旅に病んで夢は枯野をかけめぐつた元祿の俳聖のそれとは似て非なるものである場合が決して少くないのである。然るに我が菊舎に於ける旅は、實に芭蕉に於けるそれと同じであつたと云つても決して過言ではないであらう。



# 古代研究の一基礎

——その語學的方法——

瀬 良 益 夫

一

凡そ言葉程、社會的であり、歴史的であり、従つて人間的なるものは、稀であると言はれる。溢れる生命の流出として、それ々の言葉は、時間的にも、空間的にも、それ々の人間の心性を表現するとされるのである。

かくて、古代人の言葉は、古代的心性によつて、いろどられてゐると考へるより外はないであらう。後世の、そして特に現代の我々が、ともすれば看過する、古代日本人特有の精神生活が、その中に鋭く反映してゐるといふことも、自明の言柄として考へ得る。

本居翁が、古代學の出發點として、古語の研究を重要視し、力説した所以も亦こゝにある。

固り古語は、最も明かに、その形態に於いて特殊である。然し、言語にとつて本質的なるものは、形態でなく、むしろそれが擔ふ意味である。更に言へば形態が意味をつくるのではなく、かへつて形態は意味の外廓であり、圓に於る圓周の如きものにすぎない。

本居翁が、古事記傳に於て實踐したその語學的方法に於て、精緻なる形態的方面の考察も、もとより驚くべきものであるが、尙更に注目すべきは、その鋭い意味把握の仕方である。

翁は傳の中に、くりかへし、古代の意味は、後世的のそれと餘程趣を異にすることを力説してゐるのであつて、こゝに古代學の基礎が存在することを明かにしたのである。

古代學を試みんとし、その門として古代の言語を探究するにあたり、翁の方法は、深く傾聽するに足るのであつて、古語の意味と、その古代的特性の正しき把握は、最も重要視さるべきであらう。

かゝる意味に於て、今こゝに二三の古語を取り上げ、その古代的心性に關する若干の解明を試みたいと思ふ。

## 二 「遠し」考

「遠し」とは如何なる意味であらうか。吾人の意識を以てすれば、それは主體が或對象との間に、時間的空間的な「距離」を意識することに外ならない。

古代的心性に於いても果してそのまゝであらうか。もとより、吾人の意識を出でないものも數多く存するのではあるが、尙そこには左の如き二三の趣を異にした例が見うけられる。

(イ)「遠御膳」の「遠」に關する解釋

式祝詞の中に次の様な數例が存在する。

○皇御孫命能長御膳能遠御膳登聞食故

○皇御孫命能朝御食夕御食能加牟加比爾長御食能遠御食登赤丹穗爾聞食故 (以上祈年祭)

○天都御食乃長御食能遠御食登皇御孫命乃大嘗聞食牟爲故爾 (大嘗祭)

○大倭根子天皇我天都御膳乃長御膳乃遠御膳止汗毛實仁赤丹乃穗毛所聞食氏 (中臣壽詞)

以上の四例に見える「長御膳能遠御膳」は如何に解すべきであらうか。今諸説を要約すると大體左の通りである。

(一)眞淵 「長御膳云々は賀詞なり」

(解)

「長も遠も祝ことなり」

(考)

(二)重胤 「然れば此の續きも、遠神代より聞食し來る御膳の甘茶辛茶を奉りて、長く遠く聞食すといふ義なり (諸義) この外、青柳氏の正解、久保氏の略解、共に考に同じく、大久保氏の式講義も重胤と同様である。眞淵の「祝こと」の意はあきらかではないが、やはりその基ところは重胤の如く「陛下が長く永遠に聞食す」意と解して、その故に祝言とするのであらう。次田氏もやはり、眞淵重胤の意見をうけてゐられる。(新講)

然しながら、これらの解釋には疑問がある。第一に「長御膳」「遠御膳」の「長」「遠」は、「足御世乃茂御世爾齋奉利」(春日祭)の「足」「茂」と同様に、それ自體で直接に下の御膳を修飾限定する性質のものでなければならぬ。

「長御膳」は「長い御膳」であり、「遠御膳」はそのまゝ「遠い御膳」である。然るにこれを「陛下が長く遠くきこしめすその御膳」と解するのは、甚だ窮した説明といはねばなるまい。

かゝるまはり遠い解釋を導いた契機は「長御膳遠御膳」の「長」「遠」の本質を把握し得ない所から來るのである。

然らば「長」「遠」とは何であるか。それは單なる時間的、空間的意味に於ける「長」「遠」ではない。しか解する所に説明の混亂が生じるのであつて、それは單なる存在ではなく、更に價值的な意味を有するのである。

たとへば、「高御座」「豐玉毘賣」「速須佐之男命」の、「高一」「豐」「速」等が、單に時間的空間的な「High」「Opulent」「Speedy」の意味にとどまらず、むしろ一つの價値といふ美稱として考へられるのである。而も美稱といふも、それは眞善に對立して考へられる論理的區分に於ける美でなく、一切をふくめて望ましき事態であり、更に聖なるもの

に連るのである。

かくて「長御膳」「遠御膳」は、夫々「長い御膳」「遠い御膳」であるが、換言すれば、「價値ある」「のぞましき御膳」の意とされ、更に「神聖なる御食」の義であるといはねばならない。

「遠し」の古代の意味の中にかゝる面の存することを注目すべきであらう。

(ロ)「遠つ神」の問題

○珠手次 懸の宜しく 遠神 吾大王乃 行幸の 山越す風の (卷一、五)

○清江の 岸の松原 遠神 我王之 幸行處 (卷三、二九五)

に於る「遠神」は如何なる意味であらうか、諸説を要約すれば大體左の如くである。

一、契沖は「凡人の境界に遠ければいへり」(代匠記初・精、共)とし、眞淵も略同じく(考)雅澄も「天皇は即ち、神とも神と申して、人倫の境界に遙かにとほきよしにて、かくはいへり」(古義)と賛意を表し、山田博士の講義を  
始め今日一般に承認されてゐる。

二、守部は「皇統の斷絶なく、遠く久しき神に坐<sub>レ</sub>坐<sub>ス</sub>大王を稱すなり。……是を人倫に遠き意とするは非なり」  
(檜婦手)といふ。

然しながら、守部の説は「遠し」を時間的存在の意に解するが故に導かれた見解であつて、この點契沖等の説を妥當としなくてはならない。即ち「遠つ神」の「遠し」とは、時間的或は空間的にいはず何らかの客觀的な距離をもつて遠くに實在するといふ意味ではない。

そは、凡俗の人倫と類を絶して絶對的に聖なるものとして立つ意味である。即ちそのきりはなされてあることの意識が「遠」の根源的なる意味である。而してかゝる聖の體驗にもとづくが故に「大王」の枕詞となり得ることも明かであらう。

(ハ)「とほしろし」攷

以上(イ)(ロ)の兩項に於いて「遠し」は一つの價値的意味をもち而もこの意味は、俗なるものに對して絶對的に聖として立ち、その凡俗を排除、隔絶するところに構成されることを明かにした。尙この點よりして他の一問題をとり上げてみよう。

○明日香の 舊き京師は 山高み 河登保志呂之 春の日は 山し見がほし 秋の夜は 河し清けし (卷三 三三四)

○山高み 河登保之呂思 野を廣み 草こそ繁き (卷十七、四〇一一)

の「療保志呂之」に關する見解が問題となるのである。從來の諸説は橋本博士が示された様に(萬葉集論考所收、とほし考)次の二つとなる。

一、「大なり」の義とするもの(代匠註、考、新考)

二、「あざやかなり」「さやけし」の義とするもの(玉小琴、楓落集、古義)

これらの語を批判して一家の見を立てられたのは橋本博士である。博士は結論として第一の「悠大」説に賛成せられるのであるが、その根據の本質的なるものは、特殊假名遣による第二の説の否定であらう。

即ち宣長、小久老の説は「とほしろし」の「しろし」を、「いちじろし」「著ししつ」「白ししろ」等の「しろし」と、同一視する見地に立つものであるが、それは特殊假名遣の法則上不可能と考へられるといふのである。

即ち『萬葉集に於ては、「とほしろし」の「ろ」には、「呂」の字をあて「しろし」又は「いちじろし」の「ろ」には「路」をあてゝゐるが、元來萬葉集時代には、「ろ」の假名は二類にわかれてゐたのであつて、「呂」と「路」とは別の類にぞくし、決して混用することなく、隨つて當時その發音を異にしたものと考へられる』(論考一三六)

とする。博士の批判は、牢固たを假名遣の根據をふまへてゐるだけに、動かし難いものがあるが、然し吾人は尙こゝに一

つの例外を見出すのである。

之呂多倍能 安我之多其呂母 字思奈波受 (卷十五・三七五一)

の「之呂多倍能」は同じ卷に「之路多倍能」(三六〇七)ともあり、所謂甲類と乙類とが混用してゐるのである。尤もこれは已に龍鷹が奥山路に於て指摘した如く「不正なる」ものであつて或は後世のうつし誤りとも考へられる。

然しこゝに問題となるのは、當面の「しろし」「とほしろし」の語をにおいて、廣く諸語の間に於ける「ロ」の假名遣の甲乙二類の區別である。

○具漏比賣 (景行記・應神記) 甲類

可具呂伎可美 (卷十五、三六四九) 乙類

迦具漏伎可美 (卷五、八〇四) 甲類

柯波能俱盧古磨 (雄略紀) 乙類

(以上黒は通常甲類を用ふ)

○宇都呂波牟可母 (卷十九、四二八二) 乙類

宇都呂布麻泥爾 (卷十七、三九七八) 乙類

宇都路比奴良牟 (卷十七、三九一六) 甲類

宇都路布麻泥爾 (卷十七、三九八二) 甲類

(以上ウツロフは通常乙類を用ふ)

○波漏波漏爾 (卷五、八六六) 甲類

波魯波魯爾 (皇極紀) 甲類

波呂波呂爾（卷十五、三五八八）

乙類

（以上遙々は通常甲類を用ふ）

○摩都樓波奴（景行記）

甲類

麻都漏波奴（崇神記）

甲類

萬葉假名書四例あり全部「麻都呂布」の「呂」の假名（卷十八、四〇九四）、（卷十九、四二一四）、（卷二十、四四六

五）

以上 乙類

上に掲げた例に見れば（ロ）の假名に於ける甲乙二類は混同してゐるのであつて、殊に萬葉に於いて著しい。もとより龍磨が指摘し、橋本博士も言はれた様に、これは後の誤りか、或は又當時すでに兩者の混合が生じてゐたとも解し得る。

然しこれらの諸點に對する疑念から、異論も生じ得るのであつて、山田博士は萬葉集講義卷三に於て以上の事實を指摘せられ、然る後に「特殊假名遣は容易に信じ得べからざるなり」とのべてゐられる。勿論このことから、直に特殊假名遣全體を云々することは極端であるが、當面の「ロ」の假名について、又安藤教授が左の如く記してゐられる。

即ち教授は「神漏岐、神漏美」と「須賣呂伎」とを、比較研究せられ、その「ロ」は一種の造語成分であり、かくて「カムロギ、カムロミと、スメロギとは、前者は、神祇についての語であり、後者は天皇に關しての語であるといふ相違はあるが、その成立は同じであるといふことがいへるのである」（神漏岐、神漏美考、日本諸學振興委員會研究報告）

然るにこゝに問題となるのは、かく同一のものゝ考へられるカムロギ、スメロギの兩者の假名を見るに「カムロギ、カムロミのロには、一二の例外を除いて、甲類の漏魯が用ゐられて居り、スメロギのロには、乙類の呂侶が用ゐられてゐる」ことである。

然し教授によればこの「ロ」の假名には甲乙二類出入があり、（上掲の諸例をあげ）「これらの點はなほ考究を要する

も、けだしカムロギ、カムロミの口と、スメロギの口とを、同種のものとして取扱つて差支ない所以を「説明するものであると考へる」(一一頁)といふのである。

以上縷々と諸家の説をあげて「ロ」の甲乙二類に言及したのは、先に問題とした「とほしろし」の語が、或は「いちしろし」と同一根源のものにあらざるかと疑ふがためであつた。

久老は楓落葉に於て兩者を比較していふ。「いち」とほとはその意相近し。いちとはあるが中にぬき出ていふ言にて、俗にいつち、至つてなどいふ言にて、至のたりを約めていちとはいふなるべし。さては、とほも達トホガの意にて達と至とはやゝ近し」

「いちしろし」の「いち」が、果して至の語から出たかは不明であるとしても、恐らく「いつ(嚴、稜威)」「の語と關係あることは否定出来ないであつて、それは神聖を意味する語に近く、その状態の激しさ、特殊な様子を意味することも明かであらう。「いちしろし」とは「しろき」事態が特に際立つて意識にせまり來り、驚愕に値するものと考へられる意味であらう。

「とほしろし」の「とほ」をこの「いちしろし」の「いち」と比較して説いた久老の見解は面白く、橋本博士は「果してそんな意義用法があるであらうか、他に適切な類例でもない限りたやすくこの説明に満足することは出来ない」(とほしろし考)と否定されたのであるが、尙一理ありと思ふ。

何となれば、既に説明した如く、「遠し」とは、對象が特殊なるもの、いはゞ凡俗の自己に對して、絶對的に聖なるもの、として立つ意味をも持つのであつて、此の點「いつ」「いち」と相類するのである。

いはゞ「とほしろし」とは「しろき」事態が「とほく」あるたゞまひを、示すものといへよう。それは空間的にも遠くあることを含むかもしれないが、然し單なる空間的意味にとゞまらず更に川の流れのけざやかに、特別な姿として感じら

れることが根本であらう。

「とほしろし」の「とほ」を、かゝる根底より理解することによつて、更に「悠大」の義も素直に導かれると思ふ。

○「集大小之魚（神代紀下）大小（トラシロクチヒサキ）寛文版日本紀訓」

○「大小之（止乎之呂久知比左岐）私記訓」

○「人骸偉大（ホネトラシロシ）石山寺所藏大唐西域記訓點（假名遣及假名字體沿革史料）」

以上は橋本博士の掲げられたものであるが、尙その外に中世の歌論等に見えるものも含めて、これらは「とほしろし」と同一語であるといふことである。（とほしろし考）

然らば何故に「大」の字を「とほしろし」とよむか、「とほしろし」を「しろし」と關係づける者にとつて、通常こゝに一つの困難が存する様であるが、「大いなるもの」又は「すぐれたるもの」とは、自己に對して特殊なるもの、凡俗ならざる神聖なものとして考へられる意味である。従つてそは、「遠きもの」「いちじろしきもの」とも考へられる。

かくして「とほしろし」は、一方物のたゞまひの「鮮か」なることを意味すると共に、他方「大なるもの」「すぐれたるもの」としての性格を有する。

故に在來「悠大」「鮮明」の二義に分けられたものも、その根源に於ては實は一つであつて、そは主體に對して絶對的な或はつよき力をもつてせまり凡俗に對する特殊的存在として、立つところに本質を見出すと思ふ。

以上は貧弱極る思ひつきであり、一つの試論にすぎないが、「とほしろし」の「とほ」が或は「遠」の語と關係を有するのではないかと推測する所から、敢て一つの憶測をこゝろみたのである。

### 三 「坂」の理解

「坂」とは一見單に傾斜の地面に過ぎない様に見える。然らば坂にとつては、その傾斜をなしてゐることが、本質なの

であらうか。

「即塞<sub>ニ</sub>海坂<sub>ニ</sub>而返入」（記上卷 豊玉毘賣命）の「海坂」に關して、古事記傳は次の様に言ふ。

「師の宇那佐加と訓れたるに従ふべし。坂は堺<sub>サカヒ</sub>の義にて（佐加比とは、此方より上る坂と、彼方より上る坂との合つ所を云て、坂合<sub>サカヒ</sub>の意なること上に云るがごとし。さて坂とのみ云ても、即ち堺のことなることもあり）、海神の國と此上<sub>ツ</sub>國との間の隔ある所を云なり」（卷十七）

又同じ條に、萬葉集卷九浦島子傳説歌の「海界乎過而榜行爾」とある「海界」に關しても「海界も此と全同じければ、相證して彼をもウナサカと訓べく、此の坂も堺の意なること明らけし。」としてゐる。

以上の「海坂」「海界」は、別に傾斜をなせる地面ではなく、堺<sub>サカヒ</sub>の意なること宣長の指摘したとほりである。然らば「坂とのみ云ても即ち堺のことなることもあり」といふ風に、坂の意味が轉用されたのであらうか。

然し轉用といふと、それが如何なる契機にもとづくものであるか、猶十分「坂」の本質を把握する必要がある。

「大王之 界賜跡 山守居 守云山爾 不入者不止」（卷六・九五〇）

の「界賜跡<sub>サカヒノミヤト</sub>」について古義は「界はサカフとも、サカへとも活用言なれば、此には用言につかひたり」と説明してゐるが、蓋し「サカヒ」は動詞「サカフ」の連用形より出た名詞に外ならない。

「則隔<sub>サカヒテ</sub>山河<sub>ニ</sub>而分<sub>ニ</sub>國縣<sub>ニ</sub>」（成務經五年九月）

「巡<sub>ニ</sub>行天下<sub>ニ</sub>限<sub>ニ</sub>分<sub>ニ</sub>諸國之境堺<sub>ニ</sub>」（天武紀十二年十二月）等の「隔」「限分」を「サカフ」と訓んであるが如く、こゝに動詞「サカフ」の存在を發見する。

この「サカフ」と「坂」との關係について、宣長は、「坂合つ」の説を提出してゐるのであるが、それはともかくとして、兩者が密接な關係にあることは疑ひない。

恰も「歌」と「歌ふ」とが同一のものである様に、「坂」と「塚ツカふ」とは同じ意味でなければならぬ。こゝに「坂」が「塚ツカ」ともなる理由がある。然らば兩者の根源は何處にあるか。

思ふにそは、「割サク」「放ツク」「離サク」「放カル」等一聯の語と關係を有するであらう。「割サク」「放ツク」とは、彼と之とを分離し、兩者を區別する意である。

「於世波左久禮騰 吾はさかるがへ」（卷十四 三四二〇）

は親が兩者の仲を阻隔して、無縁の關係にあらしめることである。

「奥疎神」（古事記上卷）は、「訓疎云ツカカル」とあるが、「疎」の字は又「疎備荒備」（御門祭）の様に「ウトシ」とも用ゐられ、かくて「サカル」は自己と「ウトリ」「無縁」になりゆくことである。

以上の點より考察するならば、「坂」「塚」の本質が、客觀的に傾斜をなせることにあるのでなく、むしろ彼方と此方とを分離區別する、いはゞ境界にあることも自明であらう。「サク」ことがその本質である。

「黄泉比良坂」とは何であるか。そは黄泉國と、現し國との境界の、象徴的表現にすぎない。この坂に於て「度ニ事度」とは如何なる意味であるか。事戸とは「絶妻之誓此云ニ許等度」（紀神代卷一書）とある如く、その縁故を絶つことの意味である。

現し國に對して、黄泉國は神聖なる世界である。そは世界の質をことにするが故に、現し國の男神と、黄泉國の女神とは、愛しき夫婦の縁を絶ち、無縁のものとなさねばならない。

「塞坐黄泉戸大神」とは、凡俗の現し國と、神聖の黄泉國との堺をかぎり、兩者の混融を禁ずる力の人格化に外ならな

す。

坂は古代人にとつて聖なるものであつた。

「八十氏人の 手向する 恐乃坂爾 幣奉り」 (卷六・一〇二二)

「知波夜布留 賀美乃美佐賀爾 幣奉り」 (卷九・一八〇〇)

「東の國の 恐耶神之三坂爾」 (卷九・一八〇〇)

「足柄の 美佐可加思古美」 (卷十四・三三七一)

「近江路の 相坂山に 手向爲」 (卷十三・三二四〇)

「坂」を神聖視するのは如何なる根據にもとづくか。その客觀的傾斜のけはしさによる恐怖を力説するのは十分でない。坂は塚である。此方と彼方、此の國と他の國、己が社會と他の社會との間を畫する線に外ならない。古代人にとつて、かゝる兩者は、各絶對に質を異にするものとして、嚴重なる規範と拘束の下に區別せられた。境界とは一つの規範の具體的表現に外ならない。

かゝる規範は己に對して立つ拘束をおして、塚を出でることの故に、坂をこえる者は「坂」をまつるのである。

後世、坂といへば、客觀的に傾斜をなせる地面をさすことにきまつてゐる様であるが、それは上述の內的體驗が、客觀的に具體化せられ投影せられた姿にすぎない。

#### 四、言語と社會

以上、「遠し」或は「坂」の如き、空間的性質を表すと考へられる言葉を取り上げて、その底にひそむ價值的、主體的意味を探究した。

然しながら、或は客體的といひ、或は主體的と稱するも、古代人にとつて實はかゝる明かな區別はない。兩者融合相即の形に於いて、吾人にとつては、單に時間的空間的存在と見えるものも、なほ根底に、主體的、内面的な價値意識を含み、又反對に主體的價値意識も、空間的時間的存在を排除してはありえない。

更に云へば價値は即存在であり、存在は即價値として分つべからざるものである。

然しながら、かゝる融合の中より、次第に客觀的存在の面が分化し、そこに價値と存在とが分離獨立の傾向を示し來ることは否定出來ないのである。

とはいふもの、我々の考へ方よりして、その空間的時間的存在の面を重視し、古語の意味を其の一色にぬりつぶして説明することは十分ではない。否強ひていへば、かゝる時空的存在を可能ならしめるものは、かへつてその價値的側面にありといひ得られるのであつて、兩者は更に別の根源より説明さるべきであらう。

蓋し、言語は最も人間的なるものであるが、それは社會的地盤より出で、社會の中に生きゆくものである。この社會性を無視した説明は全く無力である。如何に巧妙なる説明と雖も、言語の本質は、個人を基礎とする心理的、哲學的説明によつてつくされるものではない。

上に掲げた、「遠し」或は「坂」の意味も、その基底に古代人の社會生活があり、その集團表象によつて、はじめて可能ならしめられるものである。

「荒ぶ」とは、通常一つの「暴悪」の行爲を指す様であるが、その根底は、自己より背く行爲であり、いはゞ自分の仲間としてとなく、他者として存在する意味に出發する。

「放鳥 荒備勿行 君不座十方」 (卷一・一七二)

「往鳥毛 荒備勿行 年替左右」 (卷一・一八〇)

等の「荒び」は暴悪の行爲をする意味ではなく、その場所を「離れ去る」意に外ならぬ。

「疎備荒備」(御門祭)の、「疎」も「荒」も、同意の語を並列したのであつて、それは「親まざること」「背反すること」が本質である。

又反對に「和」とは「自己にしたしくすること」「仲間としてあること」が根本である。

「丹杵火爾之 家ゆも出で」(卷三・四八一)の「ニキビニシ」は「親びにし」であり、「和」を動詞化したものである。「角島の 迫門の稚海藻は 人の共 荒有之可杵 吾共者和海藻」(卷十六・三八七)

の「和」は「荒」に對立する語であり、兩者夫々「親和すること」「親まざることを表すのである。

「類有三種」。遠者名<sub>ニ</sub>都加留。次者<sub>ニ</sub>鹿<sub>ニ</sub>蝦夷。近者名<sub>ニ</sub>熟<sub>ニ</sub>蝦夷」(齊明紀五年、伊吉連博徳書)

「より遠きもの」を、「鹿」と言ひ、「より近きもの」を「熟」と稱するのは、何によるか。蓋し、「遠」「近」は單に空間的存在の意に留らず、「遠」とは、特殊なるもの、聖なるものとして、自分達を離れて別個に立つことであり、従つて「アラキ」こともなる。又「近」とは反對に仲間として和合する意であり、かくて「ニギ」の意とも考へられる。

別に「遠い地方のもの」が「荒ぶる性質」であるから名附けたものでもなく、又「近い蝦夷」が、偶然に溫和であつたから稱したものでない。

こゝに言語の意味が社會生活の反映であり存在といひ、價值と稱するも、皆社會的關係を離れては考へ得ない所以がある。

(猶・原田敏明先生の「惡神に關する古代觀念」参照宗教研究新八卷三號)

## 五 「清淨美」の基底

古代の文藝が「清淨の美」に於て一つの特色を持つことは、既に高木教授の度々指摘せられた所である。(「萬葉集講座第五卷」、「雜誌文學昭和十三年十月號」,「日本文學の環境」)

今年九大國文學大會に於て、試みた拙論は、要するに、「清淨美の地盤を「神聖觀念」にもとめんとするものであつた。固り美は、藝術の理念として、神聖觀念とは異なる領域に於てあり、又萬葉集等の作品は、文學として、說經等の宗教

的なるものとは、別であるとも考へられる。

然し美と云へば、直に所謂眞善美の、規範的論理的なるものを想起して、その孤立的なる純粹の立場を守らうとするとは、決して具體的な古代の作品を把握する所以ではない。

「生」は融合聯關せる一つの全體に於てあり、神聖の體驗は、かゝる統一の局限として、眞善美の各をつらぬくことは、既に自明の事柄とされてゐる。

古代的世界は、まさにかゝる人間の本性の、最もよき典型である。古代人の統一的心性は、文化の各方面に現れてゐるのであつて、かゝる全體的背景を忘却しては古代美の把握も頗る抽象的となるであらう。

今こゝに二三の例を掲げよう。

「天地の 分れし時ゆ 神左備手 高く貴き 駿河なる 布士の高嶺を」

は「卷三・三一七」にあり、自然詩人山部赤人の作として、あまりにも有名であるが、その「布士山」に對して抱く意識は、單なる清淨秀麗の美にあらずして、尙「神さびて高く貴き」いはゞ、神聖の體驗を含むのである。

そは所謂審美的な美に留らず、より深く善をも眞をもふくめて、全我をあげた驚異の念が存するのである。眞實に奥深き美は、やがて神聖なるものに連することは、人間の歴史に普く見るところであらう。

「山見れば 高く貴し、河見れば 左夜氣久清之、水門成す 海も廣し 見渡す 島も名高し こゝをしも 間細美香

母」 (卷十三・三三四)

に於て山の「高く貴き」姿と、河の「清淨」なる眺望とが並列せられ、兩者共に「眞細しきもの」として、美的對象となる。かくて「美」なるものは、清淨を含むが、又それは「高貴」なるものを内に包むのである。

「芳野の宮は 山高み 雲ぞたな引く 河早み 湍之聲曾清す 神左備而 見者貴久 宜名倍 見者清之 此山の 盡

きばのみてそ 此河の 絶えばのみこそ もゝしきの 大宮處 止む時もあらめ」

赤人のこの歌（卷六・一〇〇五）に於て、「神さびて貴き」姿に對し、「よろしなべ清けき」たゞづまひがあり、かくて兩者相俟つて王都の永遠性があるとされる。いはゞ美しき清淨の山河が、神聖の體驗を導き、その體驗の故にこそ永遠が感じられるのである。

「山見れば 見のともしく 河見れば 見乃佐夜氣久 物ごとに 榮ゆる時と めしたまひ」（卷二十・四三六〇）  
に於ては「羨しく」「情けき」山河が「榮ゆる生」の表現してあり、「あはれ あなおもしろ あなたのし 阿那佐夜憩 おけ」の「サヤケ」と共に、よろこばしき「光明的生命」の象徴となるのである。

以上の例によつて明かなる如く、「清淨」はその根底に、美と同時に善をも、眞をも含みつゝ、生の渾然たる統一として、神聖の體驗をふまへて立つのである。

而も美や善があつて、然る後聖があるのではなく、かへつて神聖こそ、美や善を可能ならしめる地盤であり、そこから各々が分化するのである。

美的なるものも、かゝる地盤より出でて、その地盤の統一性を否定しつゝ、それ自體の方向に分化發展するのであるが、然しそは、聖なるものより、全く遊離隔絶する意味ではない。聖なるものは常に價値の局限、或は統一として人間の歴史に宿命的に存在するのであつて、發展の極る所、分裂の頂上に於て常に人間は神聖に際會するのである。

かく見る時「清淨」の美も、我々が今にして考へる所の「單に穢無き姿」とは餘程趣を異にするのであつて、その「清淨」「不淨」「穢」等の概念もその背後にある宗教的性格を明にしないで空虛たるを免がれない。

この點に關する考察は又稿を新にしてのべたいと思ふ。要之古代人の美意識の底には猶、宗教的なるものがあり、こゝに古代文藝様式の一特性があると思ふのである。

かゝる渾然たる統一的地盤より、如何にして美が分化するか、或は萬葉に於ては如何等の問題は更に第二の間ひとなるであらう。

(「神聖」の本質、並に我が古代文化に於けるその具體的表現に關しては、原田敏明先生の「神聖觀念の分化」宗教研究新第六卷三號參照、拙論を草するに當り、先生の御指示に負ふ所、多大であつたことを、特に附記する)

茶の花も咲き初めにけり春の路  
郊外に出でて鳥の聲きく  
この家もさびしさうなる戸の閉し  
ごせのおうなの夕餉つくれる  
新婚に百萬兩の旅もせし  
乙女の戀も色あせにけり  
所化の笠シミは抜けずに軒低し  
他國の飯も食ひ飽きにけり  
茜空田舎役者のさんけかな  
長者となるも一睡の夢  
木蓮の花のやうなる姿さへ

秋	高	屋	東	屋	高	高	東	秋	高	東
みたらしの	古雑誌枕に	なき人に手	職もきまり	福新樓隣	椰子の葉蔭	夏休都の友	一人となれば	小金井の櫻	芋屋の前に	小
かけに淡雪	にねむる留	向けし菊の	りて餞の宴	の部屋の怪	で妻の文	も偲ばるる	すぐ寝るなり	もちり去りて	たゝすみてあり	井
冬日もる	守居かな	香かな	の	氣	讀む					上
	同	同	東	藤	高	高	秋	東	高	
			井	井	井	井	井	井	井	

## ◎お知らせ

◇われ等の恩師たる春日政治博士が昭和拾四年九月二十二日附で九州帝國大學名譽教授に任ぜられました。會員諸兄に慶びをお頌ちする次第であります。

◇高橋重二郎氏(昭和拾參年卒業)は豫て幹部候補生として鯖江聯隊に御入隊、軍務に御精勵中でありました。ところが不幸にも昭和十四年六月十四日演習中不可避の事情により、負傷をされました。爾後餘病を併發し、一意加療の効もなく、遂に同年十一月十九日御逝去遊ばされました。茲に謹んで哀悼の意を表すと共に御報告申上ます。

## 編輯後記

○會誌發行が大變遅延致しまして申譯ありません。然し難産の末とはいへ、ともかくも發行の運びに到つた事とて、ホットとしてゐます。

○高木先生初め多數の方々の玉稿を戴き、割合充實したものを作り得ました。御寄稿下さいました方々に對し御禮申上ます。  
(高木記)

昭和十五年二月二十四日印刷  
昭和十五年三月一日發行

編輯者 高麻生朝詮

發行所 九州帝國大學國文學研究室

印刷者 福岡市因幡町三四番地 兒玉敬治

印刷所 福岡市因幡町三四番地 九州印刷株式會社